余市水産博物館

BULLETIN OF
YOICHI FISHERIES MUSEUM

研究報告

第 6 号 2003 年 3 月

石井 淳平 ：栄町1遺跡・大浜中遺跡出土の中世陶器について ---------- 1

澤田 真由美 ：余市の気象 ---------- 7

乾 芳宏 ：記録に見るヨイチアイヌの民族誌 ---------- 11

浅野 敏昭 ：余市町豊浜地区の「ニシン漁労」民俗について(2) ---------- 25
－漁労作業を中心とした聞取りから－

浅野 敏昭 ：「畚部洞窟古代彫刻の考察」奥野義扶氏の未完遺稿より ---------- 35

平成14年度史跡フゴッペ洞窟保存調査事業の概要について ---------- 45

平成14年度博物館活動報告 ---------- 49

余市水産博物館

余市水産博物館
研究報告

第 6 号 2003 年 3 月

＜訂 正 表 ＞

P. 36の冒頭部分で、4行分抜けている部分がありましたので加筆訂正お願いいたします。

Ⅲ スケッチ類 模写図及び計測図と集計表

（スケッチ類）

スケッチ類はB4版西洋紙のスケッチ9点であった。朱鉛筆で刻画を描き，青鉛筆で岩壁の亀裂を表現しているもので，北壁奥部最上段のス

余 市 水 産 博 物 館

余市水産博物館研究報告第６号：1 - 6. Mar. 2003.

栄町１遺跡・大浜中遺跡出土の中世陶器について

石　井　淳　平

北海道江別市西野幌 685 - 1（(財) 北海道埋蔵文化財センター）

1　はじめに

本稿では栄町１遺跡出土の白磁碗及び，大浜中遺跡出土の中世陶器の紹介を行う。栄町１遺跡は，1958（昭和 33）年に発見され，翌年の 1959（昭和 34）年に発掘調査が行われた。報告書は刊行されておらず，調査の詳細は不明である。今回紹介する白磁碗は，このとき発掘されたとみられる資料の中に混ざっていたもので，発掘以来注目されることなく，保管されていたものである。近年，余市水産博物館学芸員の乾芳宏氏が，この白磁碗が中世の輸入陶磁器であることを指摘し（乾 2001），世に知られることとなった。今回実測図とともに改めて解説を加える。

大浜中遺跡出土の陶磁器については，松下亘，宮宏明，吉岡康暢氏らによって，すでに紹介されているが，各氏の見解をふまえた上で改めて解説を行いたい。

なお，掲載した遺物実測図は，余市水産博物館が作成した実測図に，筆者が加筆，トレースしたものである。

2　栄町１遺跡と大浜中遺跡の位置と概要

栄町１遺跡（第１図）は余市町の東側，フゴッペ洞窟から約 200m東よりの砂丘上に立地する。遺物の出土地点は，国道沿いの南側で，近くをフゴッペ川が流れる。1958（昭和 33）年，畑の拡張作業中に不時発見され，刀剣類や鎧の破片などが出土した。翌年の 1959（昭和 34）年 8 月に名取武光氏の指導により，余市町教育委員会，余市町郷土研究会が発掘調査を行っている。砂丘に構築された墳墓遺跡とされるが，人骨は出土していない。遺物は，足白の太刀，兵庫鎖，鎧の大袖の化粧板，貝殻や骨を充満した径 30cm，高さ 12cm ほどの円形の容器が出土したとされる（小浜ほか 1963）。今回紹介する白磁碗は，このときの調査で出土した可能性が高い。

大浜中遺跡（第１図）は栄町１遺跡から西へ約 1.8km のところに位置し，さらに 2.2km 西には，中世の港湾遺跡として知られる大川遺跡がある。1951（昭和 26）年に行われた登川の切り替え工事に伴い，陶磁器や刀，鎧の一部，鍋，古銭などが発見された。本来の登川は仁木町東部の丘陵地帯の縁を真っ直ぐ北に流れ，大川砂丘の南側でほぼ 90°西に方向を変え，砂丘と平行して余市川河口に流れ込んでいた。切り替え工事は，登川を直接余市湾に流す目的で，大川砂丘を横切るように水路を掘削したものである。海岸から約 150m 離れた砂丘中を，60cm ほど掘り下げたところで遺物が発見された。出土品の多くは作業員が持ち帰ったため散逸し，残りを余市町教育委員会が保管した。その後，散逸した遺物の一部が教育委員会に返却され，現在に至っている。

3　栄町１遺跡出土の白磁碗

(1) 出土遺物（第２図）

口縁部に釉のかからない無文の白磁碗である。いわゆる「口禿碗」と称されるもので，太宰府分類のⅨ類である。高台部が無釉で，厚みのある外開きのものであることから，Ⅸ-2 類に相当する。胎土は灰白色で，釉は薄い。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部付近で緩やかに外反する。口縁端部と，口縁部内面の釉を削り取る。底部見込みには花文が押捺される。花文の一部に漢字の「當」または「富」とみえる部分があるが，文字であるかどうかは不明である。

「口禿碗」の道内での出土例は少なく，類例は函館市志苔館跡で出土した白磁碗１点のみである。

(2) 年代観

14 世紀から 16 世紀にかけての白磁の編年を行った森田氏は，「口禿」の白磁をＡ類とし，その輸入年代を

①太宰府史跡第 33 次調査で検出された SD605 で，貞応３年（1224）の銘の入った木札と供伴したこと

②13 世紀前後の一括資料の中には含まれない

こと
③14 世紀中頃から 15 世紀前半代の陶磁器が多量に出土した，沖縄県勝連城跡から本品が出土しないこと
から，13 世紀中頃から輸入が開始され，13 世紀後半にピークを迎え，14 世紀前半代には輸入が止まるとしている（森田 1982）。

4　大浜中遺跡出土の中世陶器

(1) 出土遺物（第 2～3 図）

1 は片切彫りによる幅広の蓮弁文をもつ青磁碗で，上田分類B-Ⅱ-b 類に相当する。器高が低く，体部は内湾しながら立ち上がる。釉は厚く，高台内面までかかる。畳付きの釉は削り取らない。見込みには片切彫りによる草花文が描かれる。

2 は片切彫りによる幅広の蓮弁文をもつ青磁碗で，上田分類B-Ⅱ-b 類に相当する。器高が低く，やや腰の張る器形である。釉は厚く，畳付きをわずかに越えて高台内面にかかる。見込みに圏線が施され，圏線の内側には花文が押捺される。

3 は青磁の無文端反り碗で上田分類D-Ⅱ-a 類に相当する。口縁部は丸みをもち玉縁状となる。釉は厚く，高台内面までかかる。底部外面は無釉となる。見込みには圏線が施され，圏線内には花文が描かれる。釉が厚いため花文の輪郭は不明瞭である。

4 は口縁部に雷文帯をもつ青磁碗で，上田分類C-Ⅱ-a 類に相当する。比較的大柄な器形で，釉が薄く，シャープな印象を受ける。釉は畳付きを越えて高台内面の途中までかかる。体部はロクロ目が明瞭に確認できる。見込みには圏線を施し，圏線内には草花文が押捺される。

5 は瀬戸美濃の天目茶碗で，古瀬戸後Ⅳ期（新）に位置づけられる。やや腰高の器形である。体部は直線的で，口縁部付近で屈曲し、垂直に立ち上がる。口縁端部は玉縁状に肥厚する。高台は小さな削り高台である。釉は厚く，内面全面と外面体部下半までかかる。体部下半では，釉溜まりが顕著である。釉の一部が底部に流れ落ち，窯壁の一部が付着する。外面体部下半から底部までは，薄く錆釉が塗られる。

6 は青磁の端反り皿である。体部下半で強く屈曲し，口縁部に向けて直線的に立ち上がる。口縁端部は玉縁状となる。高台内部を除き，全面施釉される。底部の釉は，畳付きを越えて高台内の外縁までかかる。見込みにはスタンプによる草花文が押捺される。草花文の一部に漢字で「大」とも読める部分が存在するが，文字か文様の一部かは不明である。

7 青磁の端反り皿である。体部は内湾しながら立ち上がり，口縁端部は緩やかに外反する。釉は厚く，全面施釉される。体部及び底部外面に窯壁の一部が付着する。高台内の釉は環状に削り取られる。見込みにはスタンプによる花文が押捺される。

8 は青磁の端反り皿である。比較的大型で，体部は直線的に立ち上がり，口縁部は大きく外反する。釉は厚く，全面に施釉した後，底部外面の釉を環状に削り取る。

9 は青磁の稜花皿である。体部下半で強く屈曲し，外反しながら立ち上がる。釉は厚く，高台内面までかかり，底部にも及ぶ。見込みには片切彫り風の草花文が描かれる。

10 は青磁の稜花皿である。体部下半で強く屈曲し，外反しながら立ち上がる。釉は薄く，全面施釉される。高台内の釉は削り取られる。見込みには片切彫り風の草花文が描かれる。底部見込みには圏線が施され，圏線内には印花文が押捺される。

(2) 年代観

瀬戸美濃天目碗は古瀬戸後Ⅳ期（新）で，生産年代は 1460～1485 年に位置づけられる。青磁は，15 世紀前後から 15 世紀中葉頃の一括資料とされる，紀淡海峡出土遺物に類例があり，大浜中遺跡出土の陶磁器も，この時期の一括性の高い遺物群と考える。ただし，蓮弁文碗については，紀淡海峡から出土したものより一段階古く，14 世紀後半から 15 世紀前葉に位置づけられる。

5　まとめ

栄町 1 遺跡出土の白磁碗は，13 世紀中頃から 14 世紀前半に，大浜中遺跡出土の青磁碗皿は 14 世紀後半から 15 世紀中葉に，瀬戸美濃天目碗は 15 世紀第 3 四半頃に、生産または輸入されたものである。埋納または廃棄された年代は，栄町 1 遺跡では白磁碗の年代から 13 世紀中頃を上限とし，遅くとも 15 世紀代と考える。大浜中遺跡では，瀬戸美濃天目碗の年代から 1460 年頃が上限となる。出土遺物からみると両遺跡の間には

1世紀近い隔たりがあるが，栄町1遺跡出土の白磁碗が伝世品である可能性も否定できないため，両遺跡の並行関係は不明である。

また，両遺跡との関連が推測される大川遺跡は14世紀後半ー15世紀前半に最盛期を迎え，その終焉は珠洲系陶器，瀬戸美濃の年代から，15世紀中頃である可能性が示されている（吉岡2001）。栄町1遺跡では白磁碗の上限年代が13世紀中頃であることから，埋納または廃棄された年代は，大川遺跡の存続期間内に収まる可能性が高いが，大浜中遺跡では，大川遺跡では出土が確認されていない，古瀬戸後Ⅳ期（新）（1460ー1485年）の瀬戸美濃天目碗が出土していることから，大川遺跡の廃絶後に埋納または廃棄された可能性がある。

本稿執筆の機会を与えていただきました，余市水産博物館の乾芳宏氏，お忙しい中，資料見学の便を図っていただきました，余市水産博物館のみなさまに謝意を表します。

また，本稿で使用した遺物実測図のトレース，図版作成には松田優可氏の協力を得ました。お礼申し上げます。

伝栄町1遺跡・大浜中遺跡出土中世陶器一覧表

番号	遺跡名	種類	器種	分類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
	栄町1遺跡	白磁	碗	太宰府分類Ⅸ-2類	16.5	7.6	5.1
1	大浜中遺跡	青磁	蓮弁文碗	上田分類B-Ⅱ-b類	12.4	6.2	5.6
2	大浜中遺跡	青磁	蓮弁文碗	上田分類B-Ⅱ-b類	13.4	6.7	6.0
3	大浜中遺跡	青磁	無文端反り碗	上田分類D-Ⅱ-a類	15.0	6.6	6.4
4	大浜中遺跡	青磁	雷文碗	上田分類C-Ⅱ-a類	13.9	7.7	5.3
5	大浜中遺跡	瀬戸美濃	天目碗	古瀬戸後Ⅳ期（新）	12.2	7.0	3.9
6	大浜中遺跡	青磁	端反り皿		12.7	3.2	7.7
7	大浜中遺跡	青磁	端反り皿		11.9	3.8	6.6
8	大浜中遺跡	青磁	端反り皿		14.6	4.0	8.0
9	大浜中遺跡	青磁	稜花皿		11.5	3.1	6.0
10	大浜中遺跡	青磁	稜花皿		13.0	3.1	5.4

<参考文献>

森田勉　1978「太宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館研究論集』4集

森田勉　1982「14ー16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2

上田秀夫　1982「14ー16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2

藤澤良祐　1991「瀬戸古窯址群Ⅱ-古瀬戸後期様式の編年-」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要X』瀬戸市歴史民俗資料館

小浜基次　峰山巌　藤本英夫　1963「有珠善光寺遺跡」『北海道の文化』特集号　北海道文化財保護協会

吉岡康暢　2001「北方中世史と大川遺跡」付編15『大川遺跡における考古学的調査Ⅳ』北海道余市町教育委員会

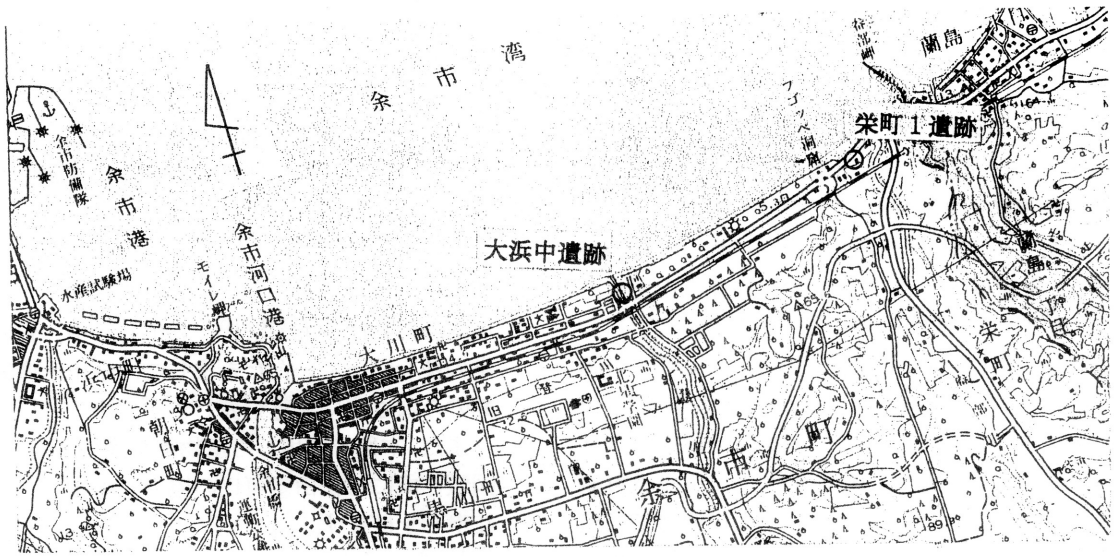
宮宏明　1997「北海道大川遺跡、大浜中遺跡出土の中世陶器」『貿易陶磁研究』第17号　日本貿易陶磁研究会

松下亘　1984「北海道出土の中国陶磁」『北海道の研究2』考古編Ⅱ　清文堂出版

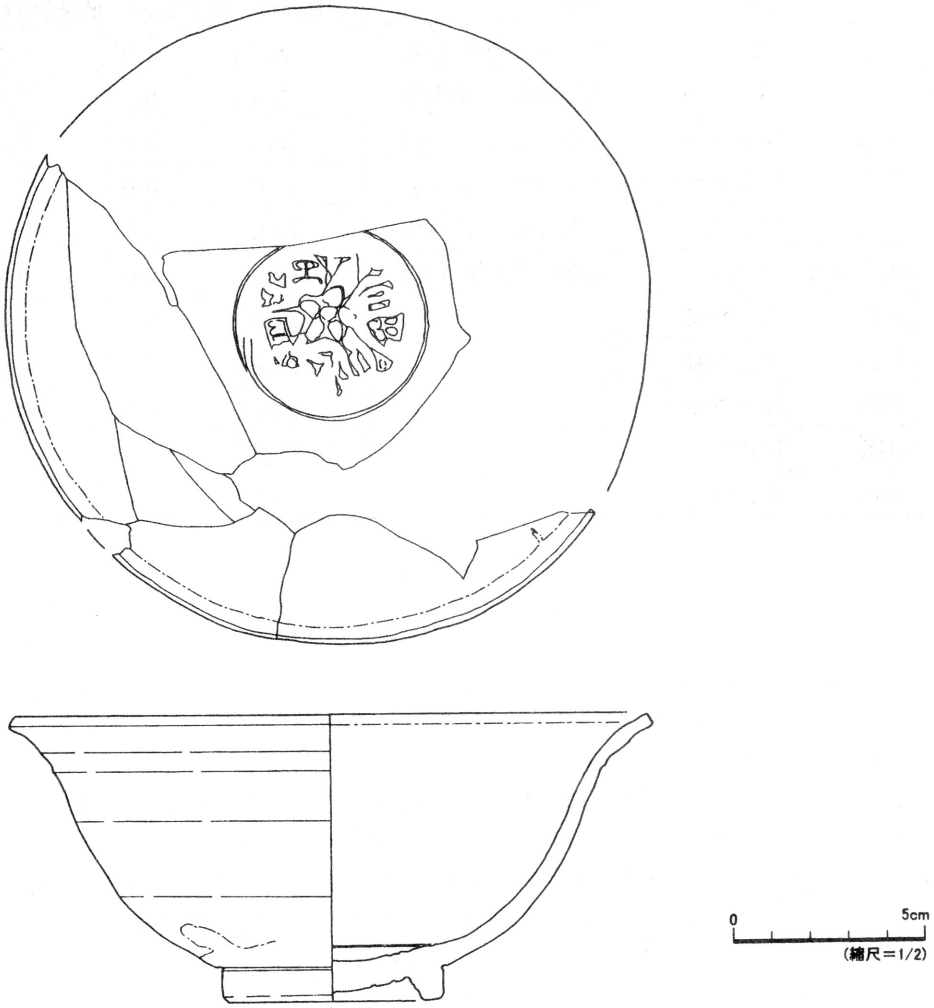
松下亘　1973「北海道余市町大浜中遺跡の遺物」『北海道考古学』第9輯

乾芳宏　2001「余市川流域の中・近世遺跡」『北から見直す日本史』大和書房

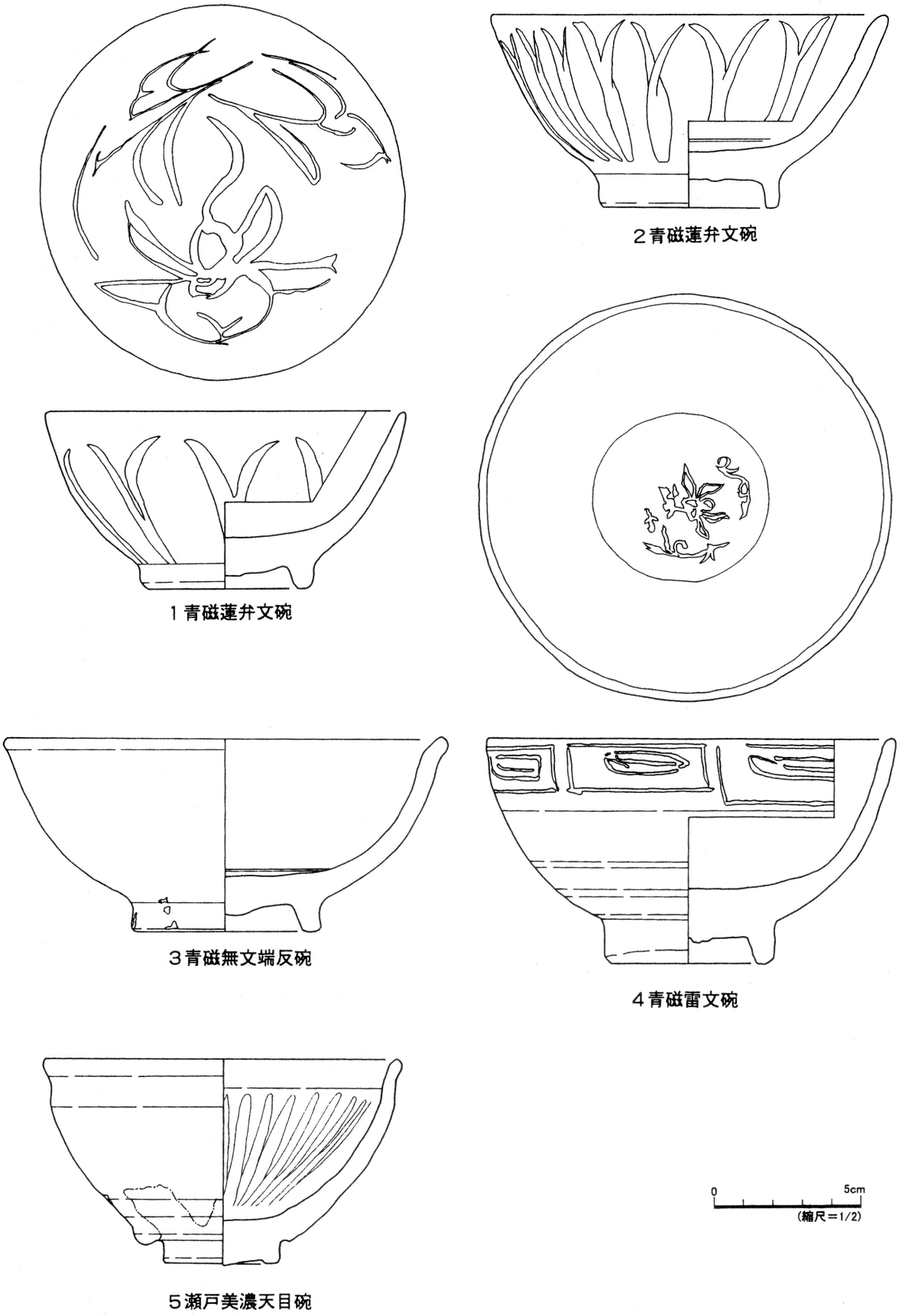
栄町1遺跡の白磁については上ノ国町の松崎水穂氏が陶磁器調査の際に発見したものであり，その後乾学芸員により文章で報告されている。



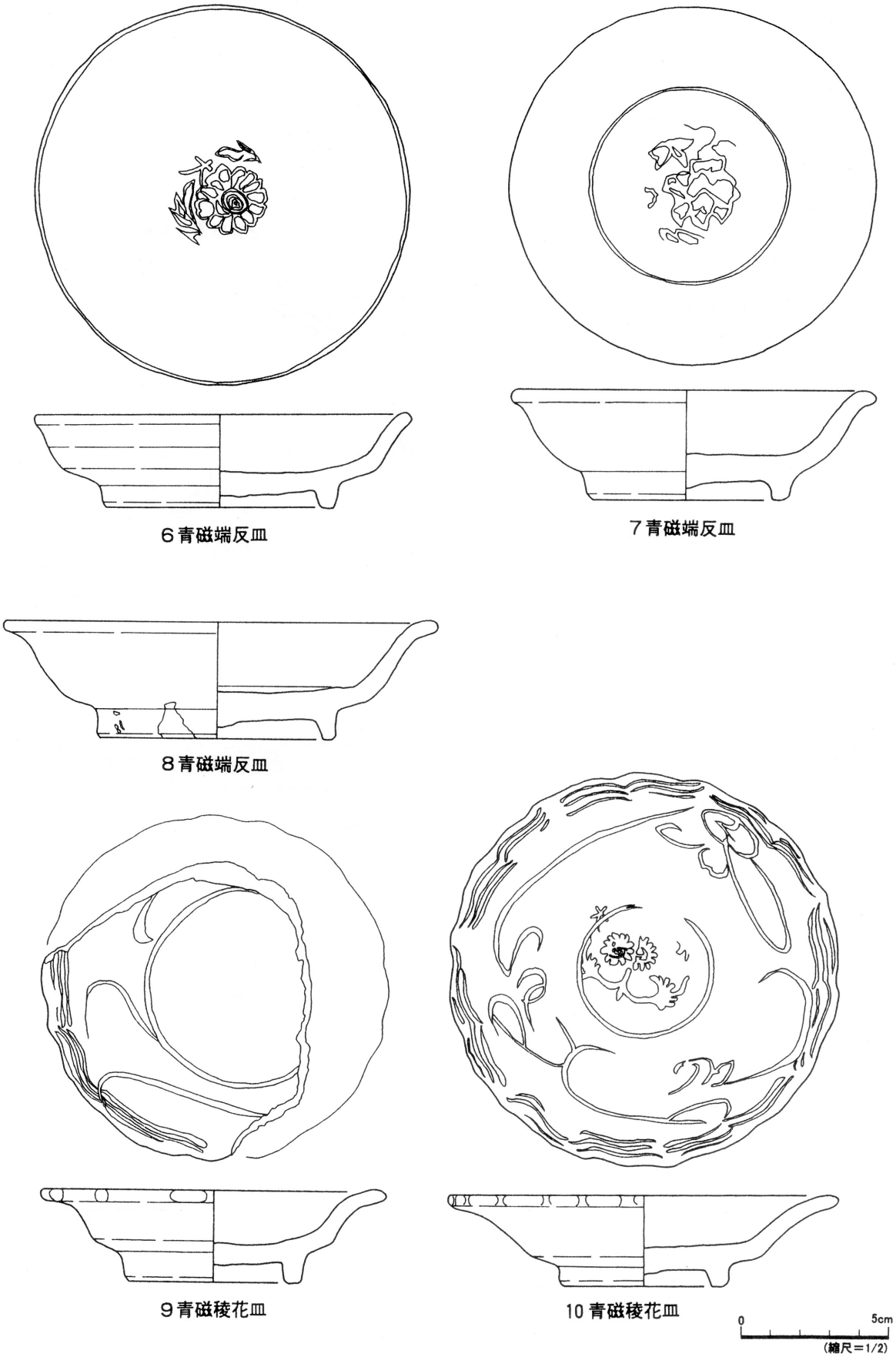
第１図　遺跡の位置図　（縮尺１：50,000）



第２図　伝・栄町１遺跡出土の中世陶器



第3図　大浜中遺跡出土の中世陶器（1）



第4図　大浜中遺跡出土の中世陶器（2）

余市水産博物館研究報告第6号：7－10. Mar. 2003

余市の気象

澤田 真由美
北海道余市郡余市町浜中町178（北海道立中央水産試験場　海洋環境部）

1.はじめに

中央水産試験場海洋環境部では，平日の朝9:00に，沿岸海洋観測および気象観測を行っています。

水産試験場屋上にある風向風速計および4階にある気圧計での値を読み，試験場敷地内に設置してある百葉箱で，気温，乾球と湿球の差から湿度，24時間の最低気温，最高気温，降雨量を測り，天候，雲量，雲形を目視観測し，冬期には積雪量，新雪量を計測します。その後，風浪やうねりの方向と強さを記録し，試験場前の防波堤で海水を採水し水温を測り，海水の比重や蛍光値を測定します。

これらの観測は，水産試験場の前身となる水産調査所の沿岸定置観測から継続して行っている観測です。そのうち気象観測は，同一の記録方法では1936年（昭和11年）から続いています。但し，当時は10:00に観測を行っており，1953年（昭和28年）から9:00に観測を行なうようになりました。この気象観測について，長期間にわたって観測を続けた結果，分かったことについて紹介します。

また，気象庁札幌管区気象台は1881年（明治14年）から120年間，余市町内では1979年（昭和54年）からアメダス（Automated Meteorological Date Acquisition System：地域気象観測システム）が設置されて気象観測を行っています。これらの結果と比較したことについても記述します。

2.気温

1936年（昭和11年）から2001年（平成13年）までの66年間で，水産試験場観測史上における最高気温の記録は，1951年(昭和26年)7月20日の37.7℃，最低気温の記録は1952年（昭和27年）1月23日の-19.2℃でした。

毎朝9:00からの観測が始まった，1953年から2001年まで47年間の年平均気温の経年変化を図1，最低気温の年平均値の経年変化を図2に示します。縦軸の平年差とは，年平均気温から平年値を差し引いた値です。2001年より平年値は1971～2000年の平均値を用いています。「平年値」の求め方は，国際的に取り決められており，各国の気象機関が加盟している世界気象機関(WMO)では，西暦年の1位が1の年から数えて連続する30年間の平均値を「平年値」として定め，これを10年ごとに更新することとしています（中村・北村,1987）。

図1の平年差は，水産試験場で朝9:00に観測した気温の年平均値を1971年から2000年の平均値である平年値9.18℃を差し引いた値です。また図2も同様に，水産試験場で観測した最低気温の年平均値を1971年から2000年の平均値である平年値4.56℃を差し引いた値です。また，図中の直線は長期変化傾向を示しています。図1より，余市の平均気温は上昇傾向にあります。特に最低気温の年平均値の上昇が著しいです（図2）。この47年間で余市の平均気温は0.18℃，最低気温は0.39℃、上昇したことが分かりました。

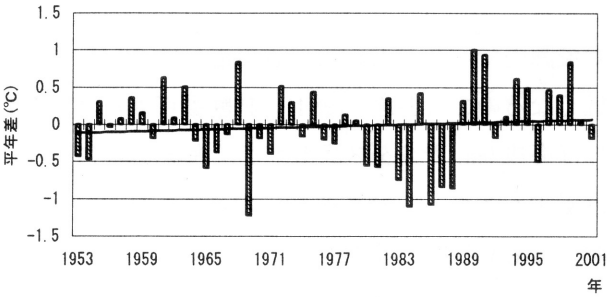


図1　余市における年平均気温の経年変化
（1953-2001年）

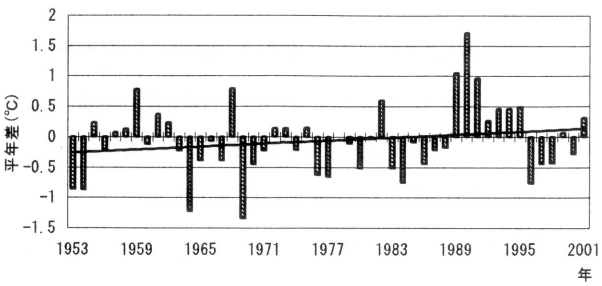


図2　余市における最低気温の年平均値の経年変化
（1953-2001年）

3.札幌管区気象台と水産試験場の平均気温との長期データ比較

札幌管区気象台では，1881 年から現在まで 120 年間観測を行なっています。その長期間のデータのうち 1953 年から 2001 年までの平均気温について水産試験場のデータと比較しました（図 3)。比較のためのデータは気象庁年報 2001 年を用いました。

札幌管区気象台における 1971 年から 2000 年の平年値は 8.54℃です。年平均気温からこの値を差し引いた平年差のグラフを図 3 に示します。この 47 年間で札幌の年平均気温は 1.3℃上昇し，長期変化傾向は余市に比べ札幌は上昇の傾きが大きいことが分かりました。

これは，札幌は都市部の気温が郊外に比べて高くなるヒートアイランド現象が起きているためであることが考えられます。

1979 年から 2001 年までの 22 年間における，アメダスによる余市の最高気温は 1984 年（昭和 59 年）8 月 16 日の 34.9℃，最低気温は 1985 年（昭和 60 年）1 月 25 日の-20.4℃でした。

2001 年における午前 9 時観測の気温の旬平均値を，水産試験場とアメダスとで比較しますと(図 4)，ほぼ同じ値を示していますが，アメダスの方が冬は低く，夏は高いという傾向が見られます。水産試験場は海に面し，アメダスが設置されている豊丘町は山間にあります。海に比べ陸地は熱しやすく冷めやすいので，わずかながらこのような差が出るのでしょう。

また 2001 年の年間平均気温は，水産試験場は 9.0℃，アメダスは 8.9℃と，アメダスは水産試験場で計測した値と比べ 0.1℃低いです。

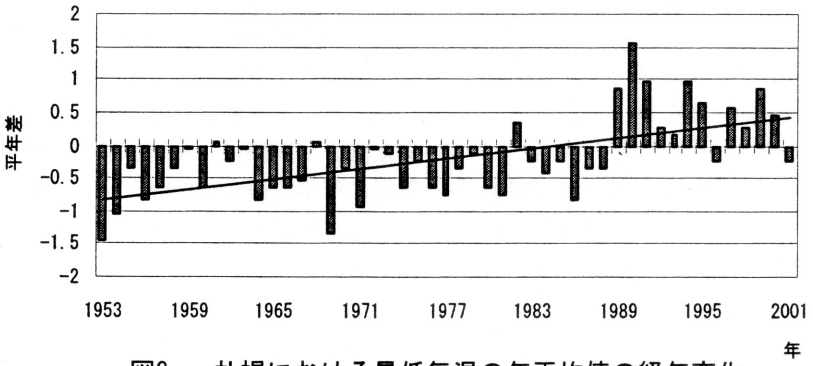


図3　札幌における最低気温の年平均値の経年変化（1953-2001年）

4.余市のアメダスと水産試験場のデータ比較

ここ余市町にもアメダス（地域気象観測システム）が設置されています。設置場所は余市町豊丘町になります。このアメダスのデータは、アメダス観測年報（平成 13 年）を用い対流圏内では高さ 1km につき気温は約 6.5℃低くなるので（小倉，1984)，試験場百葉箱はほぼ海抜 0m，アメダス設置地点は海抜 20m に位置するため，この高さ 20m の差は計算上においても 0.12℃低くなります。

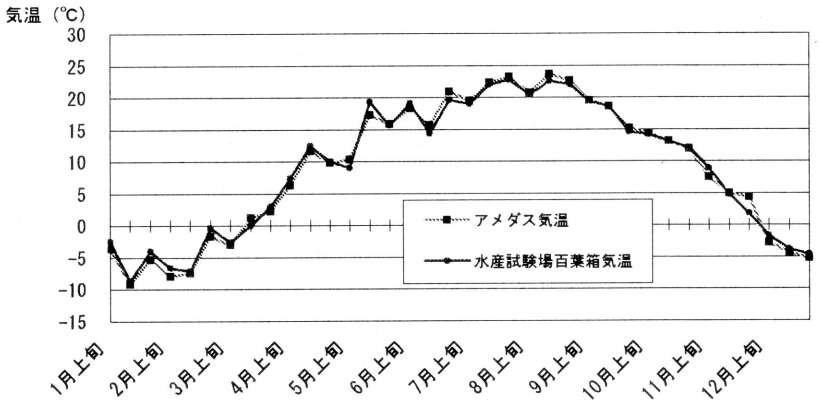


図4 水産試験場とアメダスの旬平均気温

5.積雪量

試験場内の積雪計は最大で180cmまでとなっています。その最大である180cmを越えたのは，1940年（昭和15年）と1969年（昭和44年）の2回ありました。このうち，1969年では2月の1ヶ月間ずっと180cmという記録がありますので，おそらく水産試験場観測記録で、最も雪が多かった年は，1969年ではないかと考えられます。

2001年11月から2002年3月にかけて，この冬は雪が少ないと騒がれましたが，水産試験場観測記録で積雪量が年間で最も多い2月下旬の記録において(図5)，ここ余市でも史上3番目に雪が少ない年(54cm)となりました。ちなみに，最も少なかったのは1949年の38cmで，次に少なかったのは1989年の49cmでした。

この2月下旬の旬平均積雪量の経年変化をグラフにしますと，積雪量が年々減少しているのが分ります（図6)。2月下旬の積雪量は，この66年間で18cm減少しています。

また，観測を始めてからの10年間(1936-45年）と，最近10年間（1992-2001年）の平均積雪量を比べると（図5)，積雪期間全体を通じて，近年の積雪量は明らかに少なくなっています。

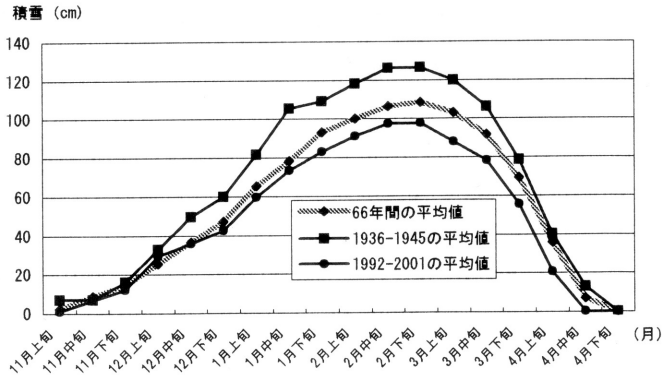


図5　余市の積雪量の周年変化.

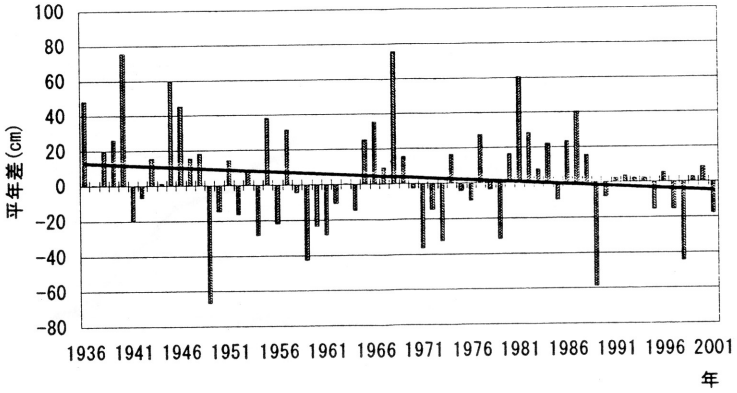


図6　余市における2月下旬の積雪量の経年変化
(1936-2001年)

6.おわりに

気象庁では，日本の年平均気温の経年変化を調べるにあたり，全国約1300箇所の観測所のうち，長期間にわたり観測を継続し，都市化による影響の少ない地点を特定の地域に偏らないように17地点の観測所を選定しています。このうち北海道内では，網走，根室，寿都の3箇所の観測所が選定されています（気象庁報道発表資料，2002)。余市もまた海沿いに位置し，都市化によるヒートアイランド現象などの影響はほとんど受けず，地球温暖化の影響を敏感に感じることが出来るのではないでしょうか。

このような気象観測は毎日こつこつとデータをためていく地味な作業ですが，重要なのは，長期間積み重ねていくということです。気象台以外で，これだけのデータが揃っているのは道内ではほとんどないでしょう。

今後も，100年200年と気象観測を続けていくことが，将来の予測に役立てることになるのです。

なお，以上は水産博物館研究報告掲載にあたり，澤田　真由美（2002）:「余市の気象」北水試だより 第57号 p12-13，に掲載されたものに加筆，一部修正したものです

〈引用文献〉

アメダス観測年報2001年（平成13年）　気象庁編集　気象業務支援センター発行

小倉義光(1984)　一般気象学　東京大学出版会　p.19

気象庁年報2001年（平成13年）　気象庁編集　気象業務支援センター発行

気象庁報道発表資料 2001年の世界と日本の年平均気温 平成14年1月18日

中村繁・北村幸房（1987）　気象データマニュアル　p.58

余市水産博物館研究報告第6号：11 - 24. Mar. 2003

記録に見るヨイチアイヌの民族誌

乾　芳宏
北海道余市郡余市町入舟町21（余市水産博物館）

Ⅰ　はじめに

北海道の先住民族であるアイヌ文化の民具や聞き取り調査等は主に胆振・日高・十勝・釧路地方の太平洋沿岸、及び千歳・旭川・阿寒などの内陸地方において行われてきた。その背景には古老の伝承者が居住し，民具等が保存されていることが多いことがあげられる。

それらと比較すると，日本海に面する地域はまったく空白であるといって過言ではない。それは早くから和人がニシン漁の漁民として深く関わり，アイヌ文化が早くから本州文化の影響を受けて変容したからにほかならない。事実，伝承者や民具についてほとんど調査できない状況にあり，発掘調査による資料の蓄積に負うところが大きい。その中にあって余市では断片的であるが数少ない記録があり，民具も幸いに残されているのである。

本稿は現在までどのような民俗の記録が残されているかの基礎調査であり保管されている民族資料理解の前提として報告するものである。

Ⅱ　記録に見られるヨイチアイヌ

近代以降の記録にもとづきながら，項目別に記すこととするが内容によって重複している部分もある。

(1) 戸数と人口

明治3年に米沢藩士の宮島幹氏が書かれた『北行日誌』8月12日には「与市駅ニ至ル入口ヲ沢町ト云フ一丁目ヨリ四丁目迄有之由也，家二百軒余土人総計三百余ノ由「モイトマリ」ト云フ断崖ノ下ヲ過キ与市運上家アリ志賀利部都ヨリ三里十三丁人馬ノ継立アリ此処ニテ昼餉ス[1]」と記している。

明治24年7月14日の小金井良精氏の日誌には「12時半余市川村着。この邊アイノ小屋数軒ある，宇生島吉なる者を訪ねた，家族は夫婦と子供4人，アイノは皆邦名の他にアイノ名を有する，これはイキシマクロといふ，その意味はイはおまへ（汝）キシマは掴むクロは人即ち人を掴む人といふ意味」とある[2]。

違星北斗氏は我家名として「私の三代ばかり前には違星家はなかった。私の祖父万次郎は4年前に死亡したが，今より55年前モシノシキへ行ったのである。今こそ東京と云うが，アイヌはモシノシキといっていた（モシリは国，ノシキは真ン中）。まだ其の頃のことであるから教育も行き渡っていない。アイヌの最初の留学生18名の一人であった。今だったら文化教育とか何々講習生といふものでせう。芝の増上寺清光院とかに居た。祖父は開拓局の雇員ででもあったらしい。ほろよひ機嫌の自慢に「俺は役人であった」と孫共を集めて，モシノシキの思ひ出にふけって語ったものであった。その頃に至ってからやっとシャモ並に苗字も必要となって来た。明治6年10月に苗字を許されたアイヌが万次郎他12名あった。これがアイヌの苗字の嚆矢となったのである。戸籍を作った当初はアイヌ独特の名附け方法で姓名を決めたものも少なくない。万次郎はイソツクイカシへ養子になったのであるが，実父伊古武礼喜（イコンリキ）の祖先伝来のエカシシロシが※であった。これをチガイに星，「違星」と宛て字を入れて現在のイボシと読み慣らされてしまったのがそもそも違星家である[3]」と記している。

大正8年頃について「現今アイヌ人の居住せるは大川町なり，居住地を俗にアイヌ町と呼ぶ，近時迄その居住多かりし臥，漸次減少して今残存せる者少なし，チャシの麓には今尚酋長の子孫居住し宝物を秘蔵す[4]」とある。

戸数と人口について大正11年には70戸，男123人・女96人の合計219人[5]，昭和11年には53戸，男141人・女104人の合計245人[6]となっている。

昭和8年刊行の『余市町郷土誌』によれば余

市町には「明治5年には35戸288人に下り，明治10年から明治14年にかけて50戸内外を上下していた」，出足平は「明治維新以前より土人部落が存在していたが，明治初年に至り，林家漁場として当部落に4ヶ所の漁場家屋を増加するに至り，和人の漁夫も入込み，土人と共に漁業に従い明治5年頃には，和人の家屋も所々に点在するに至った。その後和人の居住するもの次第に多くなると共に他方土人の勢力は減じて他に転住する者，或いは病疫の為め家系を絶つものあり現在には僅々5戸を数うるに過ぎない」，沖村字湯内は「当地は以前アイヌ居住して小部落を為していたが，70年程前に青森県人来りて小規模の漁業に従事するに及びアイヌ族次第にその跡を絶ち，和人は建網をなして越年居住するに至り百余戸に及んだ」，沖村字島泊は「運上屋制度の時代に11戸のアイヌ部落あり，林鰊場の支配を受け，夏は鮑を漁獲していた。その後間もなく和人も数戸居住し，漸次其の数を増すに及んで土人の数減少したが，明治19年の天然痘流行に遭いて大部分死亡し，当時生存する者僅々3名を算したが，是等のものも亦転住し，現在は土人皆無である[7]。」と記している。

(2) 住居について

大正5年の様子について「家屋ノ如キモ川南ノ者ハ和人ト軒ヲ並ベ其構造大差ナキヲ以テ案内者ナクシテハ其舊土人家屋ナルヲ識別スルコト難シ[8]」とある。

伝承者と知られる西村家の様子について「桁間10間，梁間6間，60坪のカヤ葺の大住居の構えで，大きな問題が起きたときは各コタンからアイヌが集まり話合がもたれていた。家の東北側の6畳は神聖なイヨイキリ（宝壇）の間で，家神のイナウなど各神が祀られ，宝物の行器，鉢，椀，刀剣，矢筒，首飾りなどが積み重ねられていた。カムイギリはその宝壇の上に吊り下げてあった。宝壇の前には朱塗りの高杯（ツキ）と捧酒箸（イクニ），キツネとシギの神頭骨，海から拾い上げた丸石や海岸に寄る鳥形木，山海の初物が高膳におせてあった。祖父の時代になってからは，とくにカムイギリの祭りを行っていないが，季節の狩漁猟期には新たにイナウをたてて祈願していた。朝夕の祈りは火の神についで，2番目にカムイギリを拝み，最後はキツネ，シギの神頭骨に捧酒するのが日課であった[9]。」と記している。

(3) 容　姿

大正5年の様子について「言語風俗ヨリ日常ノ生活ニ至ル迄大ニ和人化シ舊時ノ觀ヲ呈セザル者多ク，男子ハ頭髪ヲ刈リ，鬚髯ヲ剃リ女子ハ大概結髪シ顔貌モ従テ和人ト類似シテ一見識別ニ苦シム者多ク，舊時ノ如ク頭髪ヲ垂レ，鬚髯ヲ生シ，鯨黥ヲ施ス者ハ実ニ寥々タルモノニシテ被左衽ノ徒ヲ観ルコト能ハズ只老齢ノ者数輩ニ，鬚髯及ヒ鯨黥ヲ觀ルノミ[10]」と記している。

(4) アイヌ語について

大正3年の小樽新聞によれば「言語は儀式とか祝言とかを除いて，短いアイヌ語は次第に忘れつつある[11]」と記している。

大正5年の様子について「…言語ハ土語ヲ通用セズ，五十才以下ノ者ニ於テハ殆ンド之ヲ知ラザル者ノ如ク…[12]」とある。

昭和27年の座談会において「司会　アイヌ語はご存知ですか。　B それも知りませんが，祖父達はいくらか使ったらしいです。60年位前まで使用したと思います。何せ，和人との接触が他の地にくらべて早かったものですから，言葉も失われてしまった。そう云うことは和人の文化を早くから身につけたと云うことになる[13]」と記している。

(5) 入れ墨について

大正5年の様子について「…鯨黥ヲ施ス者ハ実ニ寥々タルモノニシテ被左衽ノ徒ヲ観ルコト能ハズ只老齢ノ者数輩ニ，鬚髯及ヒ鯨黥ヲ觀ルノミ…[14]」

昭和27年の座談会において「司会　今では，入れずみ，なんかしないようですが，あれはどんなわけで　A　あれは、娘になると，やるんですね，いやがる奴を掴まえて無理にやらされたなど死んだ母が云いました。」「司会　どんな意味があるんです。　A　女になったと云う意味もあるでしょうし，まあ，流行と云ったら変だがああすると，よく見えたんでしょうね。今の娘のパーマ見たいなもんでしょう[15]」と記している。

(6) 下帯について

下帯とは女性が着物の下に着けている帯であり，親から娘へと伝承されていくものである。河野広道氏の調査によれば「メノコの下帯をイ

シマと呼ぶのは北海道の西南部のアイヌの詞であるらしく，日高の沙流沿岸に住むアイヌは此をポンク，十勝伏古附近及び勇沸郡累標を附近のアイヌはポンクツ，余市附近のアイヌはラウンクと呼んで居ります」そして違星北斗氏談として「大古ドレシマツ（大古の女神）が傳へた貞操の小帯で，処女期を越える頃母が理由を説き聞かせて腰に締めさせる紐であって，一重であるといふ。貞節を守る為の小帯で，此帯を締めて男に肌を許せば必ず其男に貞操を立つ可きものとして居る。又身護りともな，魔よけともなる。ポンクを締めつつ姦通すれば神より厳罰を受ける。ポンクを締めて居ない時は他の男と通じても貞操を破ることとならない。しかしポンクを着けて居ない時は不時の災危を蒙る故，ポンクは必ず締めて居なければならない[16]」としている。

(7) 熊送り

アイヌ民族においてもっとも重要な宗教的儀式であり，熊祭，熊送りと呼ばれているものである。

アイヌの宗教と熊について「熊をとるということは，アイヌ族に非常に喜ばれます。というわけは，熊が大切な宗教であるからであります。クマは人間にとられ，人間に祭られてこそ真の神様になることが出来るのであります。従って，熊をとるということが，大変功徳になるのであります。その人は死んでからも天国で手柄になるのであります。そういうわけでありますから，アイヌは熊をそんなに恐れません[17]」としている。

大正3年の小樽新聞には「隔年の熊祭りを行う爺さん婆さんのなかには数珠をさげてお寺へ詣で仏のお慈悲にあずかる信心家も出来た[18]」

大正15年頃の様子として「街通りの近くにアイヌ部落があり，中央の小さな広場に丸太で作った檻の中で，熊の子が飼育されていた。二才になると兇暴性が出るので，神に感謝を捧げる熊祭りが行われた[19]」と記している。

昭和12年2月25日の熊送りの様子について「熊祭りが大川町の登川河畔において厳かに執行された神の犠牲にされた熊は昨年五月下山遇住友鉱山奥即ち湯内嶽附近大川町浅井政治(44)さんが生捕りにして来て自来自宅において飼養中の満一歳の銀毛丈5尺の牡熊である。午後2時数百名の観衆に開催された登川河畔の白雪の祭場には古来の宝物，イナオによって祭壇が設けられ同町舊土人古老違星甚作（75）桃井玉四郎（61）さん外多数のウタリが参加し違星、桃井両老によって祭事が営まれ磯野キロク（86）バッコを初め十数名の婦人の哀調を帯びた熊送りの唄と踊りが手拍子足拍子によって儀式を一層劇化させる。耳輪を飾られた熊は祭壇前に据えられ更に祭事の後場の中央に設けられたシコロの神木に結ひられ浅井一族の若人順次を射込み鮮血点々として白雪を染め痛手にほうこうする悲鳴と共に凄惨な気を場にみなぎらせ若き舊土人が機を計って猛り狂ふ熊に飛びかかって押し込みシコロの木をもって咽喉を扼しかくして傷ついた若熊は昇天，これを一族が音頭と共に，祭壇に送り祭事を営みクルミを撒いて珍しい祭りを同三時半終えたがこの熊祭りは余市町として最近になくかつは古老によって営まれる熊祭りはこれが最後であろうといわれ仲々の人出であった。なほこの日余市郷土研究会では永く本熊祭りを記録に止めるべく山岸，山本正副会長以下会員多数場に赴き違星梅太郎氏の解説を聞きつつ最後までこれを見学して得るところが頗る多かった[20]。」とあり，貴重な記述となっている。

戦後の状況について「戦後クマ祭りをやったとき衣装がなかったので日高から借り，にわか仕立てで踊ったが，ヨイチでアツシを持っていたのは旧家のフチだけで，それも樺太西海岸のものだという1枚だけだった[21]」と記している。

（a）小熊の衣装

熊送りにおける小熊の衣装について「ポンパケとカムイニンガリを用いる風習は，釧路地方，余市，浜増毛，近文，十勝，樺太等に如く北方のアイヌ間に見られる。尤も余市では実物のニンガリをサランベに結び付けて用い，樺太ではマラットを叉木に安置する時に両耳から大形の削花のニンガリを下げる[22]」とある。

（b）使用する花矢（第5図）

熊送りに使用する花矢については名取武光氏の調査がある。要約すると鏑に山の神熊の足跡と，海の神鯱の実体を刻んだ花矢を，特にカムイアイと呼び，その他の文様の花矢をチロシと称している。・・・一般にチロシよりもカムイアイの方が大形に作られている。矢柄はヤナギ，

鏑はノリウツギ，矢羽はカモメの羽を用いているが本式にはアホウドリの羽を用いる。鏑には削花を立て，鏃の基部と鏑の下部，即ち2箇所に四角形または円形の色布を重ねてつける。色布のつけ方に (1) 熊神の刻印のある花矢には，赤白の布を重ねて，上下2箇所につける，(2) 鯱神の刻印のある花矢には，赤布を各1枚上下につける，(3) 矢羽のある花矢には，赤白の布を重ねて，上下2箇所につける，(4) 削花を矢羽に代用している花矢には，赤布を上下2箇所につける，(5) 矢羽をもたない花矢には (4) と同じ，花矢のこしらえの差異は対象とする神格と，それを射る人の資格に関連しているという。矢羽は羽軸を裂いて，矢筈の溝と直交するようにつける。口巻・前巻・後巻には，植物繊維を用い海苔で固定する。昔は鏑を全部いぶして着色したが，近年は多く墨で着色する。違星作の本資料は，いぶしたもの2本が含まれている。ただし，燻文の花矢では，矢筈の溝に直交するように，削りかけを2段ずつ，矢羽の代用として，矢柄の後部の両側に削りたてている。文様は6類10種にわけており，1歳熊には、チロシ30本とカムイアイ2本，2歳熊には、チロシ60本とカムイアイ4本を用いる。熊神と鯱神の刻印をもつカムイアイは，熊送りの最後の夜に，儀式の終わったことを，神々に知らせるために，空に向けて射られる[23]。

（c）神棚（カムイヌサ）について（第2・3図参照）

神々へ祈るための神棚が屋外に設けられており，名取武光氏は昭和11年に違星エカシから調査している。カムイヌサには①幣所の神（ヌサコルフチ、キケチノエ），②コタンパエカシ（祖先の名、キケチノエ），③ムエカシエカシ（同上），④熊の大神（カムイエカシキケチノエ），ユクサパニ（熊の頭骨を飾る叉木），⑤ラルコロイナウ（熊の眉）2本が附く。⑥イモカイナウ（仔熊の親へ持っていく幣），⑦原野の神（ケナシコロフチ），⑧木の神（シランバカムイ），⑨沖の神（レブンカムイ），⑩余市岳の神（ペトエトックカムイ），⑪余市川口の神（ペトプトカムイ）の11神にそれぞれ削箸をつけている[24]。

河野広道氏は昭和8年に余市を訪れ，「余市町大川町に土器発掘に行った際，海岸の丘上に海神を祭ったヌサがあり，付近には酒盃、酒瓶その他が散乱していた。ヌサのキケチノエイナウにはすべてイクニ（キケウシパシュイ）が結びつけてあった[25]。」としている。

キケウシパシュイ（キケウシパスイ）はイクパシュイ（イクパスイ～捧酒箸・捧酒箆）の一種であり山で熊をとったときや狩猟祭，イオマンテ（霊送り）などに使用されるキケ（削りかけ）のあるパスイというもので，最近では児玉コレクションにある違星家のものが1例報告されている[26]。河野広道氏の調査によれば樺太東部の東エンヂウはイクニシ，樺太西部及び北海道の西部余市，忍路付近ではイクニ（飲酒木）と呼び，「イクニの上の舟窩状の刻文をイトクパと呼びイトクパの組（3条宛）の数と，翼の数とを加えた数は6である。6という数はアイヌにとって神秘的な数であるからこのように6箇所に刻み目を有するものが，比較的祖型を保っているのではあるまいか[27]」とし，余市について一翼後向式と分類している（第4図）。

青木延広氏によれば西村良次郎氏の祖父がほぼ毎年「豊浜のレプンカムイ（沖の神）に会いに行っていた」との伝聞があり，「青木氏が昭和32年頃当地を訪れたときには神社の東側に鯨骨があり，ヌサ場も残っていたという[28]」

昭和28年の日誌には「茂入山に登る・・・海抜六十米ばかりの丘陵で，その北端の一部は，断崖をなして海面に聳えている。頂上北西隅に，小祠があり，なかに石製男根を祀る。またその南五十米ばかりに，別に小祠がある。ここはアイヌの熊祭りを行うところで祠には熊の頭骨や漆器がおさめられている。共に現在のアイヌの間に生きている信仰の対象である。元来アイヌは祠を営まないと言われるが，この南に面した木製の祠は，恐らく和人との交渉の学び取った形式であろう。神社建築に比して特に特色があるわけではないが，床が全体に比例して高いのが，特色といえばいえよう[29]」とある。

(8) カムイギリ（第6図）

復元された唯一の資料が水産博物館に保管され，断片ながら，実物資料が難波琢雄氏に所有されている。水産博物館に保管されているものは西村良次郎氏が平成元年に寄贈されたもので長さ1.2mを測る板状のものである。レプンカムイ（沖を支配する神）であるシャチ（カムイフンベ）の腹部には小さな穴があいており，ヘロキ

（ニシン），カムイチェプ（サケ），シビ（マグロ），カルマ（サメ），トッカリ（アザラシ），タンヌ（イルカ），フンベ（クジラ）が付随している。古いものはクリ材で作られ，第2次世界大戦までは祭壇が設けられ四季折々に豊漁が祈願されたが，日常は祖父の部屋のシントコなど宝物の類が積み置かれた上に吊り下げられていたと言う。またその分布について余市から石狩湾地方の西海岸一帯のコタンに祀られていたようである[30]。

(9) 占　い

キツネの頭骨は占いに使う。下顎を頭の上にのせ願い事を念じて落とし，その状態から夢判断する。シギの嘴のついた頭骨は喉を悪くしたとき、嘴のところで撫でると治る。卜占のとき，れで撫でたり，身につけると霊感を高める力があるという[31]。

(10) 歯にたいする伝承

あかえを釣る針を痛む歯に刺すと，歯痛が治る。又，まむしの膽を咬むと，歯痛が治る。又きせるのやにをむし歯に入れると，痛みが止まる[32]ようである。

(11) 酒の飲み方，食べ物

昭和27年の座談会において，酒の飲み方について「司会　呑み方に方法があるようでしたね。C　そう，呑むには一つの禮儀があった。お椀の上に箸をとって，神神に先に差し上げる意味で，箸の先につけた酒を四方に振る。天の神，山の神，地の神，火の神，また鰊の神とか、熊の神とか云ったふうに，それから呑むので和人の様にいきなり，ホイドッコのようにがぶがぶやらない」「司会　食物ではどんなものが　C　しゃく（あまにう）と云うのがあった。その皮をむいて生で食ったりしたが，なかなか乙な味で栄養もあるキトビル（ぎょうじゃにんにく）と，鰊と煮て喰う，こいつは又すばらしい。　司会　それは私も喰ったことがある絶品ですな。C　キトビルは万病の薬になる。あれをせんじて飲むと温って，元気がでてくる。干して戸口に吊して病魔の侵入を防いだりする。　司会　まだ変った美味な料理はありませんか。　B　筋子の一夜漬けをほぐして，たき立ての飯にまぜて喰う。支庁から偉い人が来たらとき食わしたらひどく嬉んだね。　C　變わったところで，熊の脳を，油肉の煮たのにまぶして食う。こいつをヌイベと云うんだが，珍味中の珍味となっている。なれぬ人には匂いが気になるけれど[33]，」と記している。

(12) 祝　宴

明治3年に米沢藩士の宮島幹が書かれた『北行日誌』8月12日には「今日ハ当所ノ土人ノ悦ヒ迚土人共百人余運上家へ集リ各古キ陣羽織ヲ着用セリ「トンス」ノ筒袖杯着用セルモアリ床ニハ加藤清正義経為朝ノ三幅対ノ画像ヲカカケ酒肴ヲ備へ拝礼シ終テ酒宴ヲ催ス事ナリ是ハ定日ヲ不期年々一両度ツツ猟隙ノ祭節日ト云フ至テ古体ナリ[34]」とある。

(13) 墓　標

大正8年頃は「又チャシは近時迄アイヌ族共同墓地となりしが，漸次改葬，現に最近迄在りし1ヶの墓標すら村の共同墓地に移され，今残存するもの無し，然れども天内氏の談に依れば，火山灰採取の為めチャシの東端掘毀の際，人骨並副葬品と覚しきアイヌ所持刀三振，装飾用玉を発掘せり」とある[35]。

道内の墓標については河野広道[36]・土佐林義雄氏[37]により調査されており，特に河野氏は分布や系統について論考され「ヨイチアイヌ　分布――余市郡余市町村大字大川村。現在北海道に現存する西エンヂウの代表的なもので余市大川町に和人と混在している。墓標はノトロアイヌ同様アシニと呼ぶ。高さは半メートル位で頭部は（股木の頭も）裁断されて孔がない。模様は一定でカムイシロシ様の×印（ウタサシロシ）とその上下に二本宛の横線が掘ってある。×印の数は一般に墓標の大きいものには多く，小さいものに少い。男標の傍らに，刀を棒の先端につけた薙刀様のものを立ててあるのが一基あったが，その柄にも墓標同様の×印と横線が彫ってあった。女は，普通，枝のない丸太を用い，老の婦人にだけ股木を使用する（一般に男標よりも細い）。唯一違星家（有名な違星北斗君の家）の男標には×印がなく網目状の模様があるが，これも×印の模様化したものらしい。男女墓標共，中央よりやや下方に白黒の布を巻く」「男標に股木を，女標には普通股のない丸木を用いるが，老年の婦人のみ男標同様股木を使用する。但し，男標より一般的に細い様である。新しい墓標には中程に黒白の布を巻きムリリと呼ぶ紐で結んであるが，風雨にさらされて居る間にと

れてしまう。違星家の墓標の模様のみは少し異る。功労のある男子の墓には墓標の傍らに槍，薙刀を立てる」「墓標にカムイシロシ様のシロシをつけるのは，私の知っている範囲内では西エンヂウのヨイチアイヌ，メナシクルの一部（T字型女標を使用するもの），アバシリアイヌ，シュムクルの小樽，浜益付近アイヌ，及びペニウンクルであるが，特に×印（ウタサシロシ）がこれ等のアイヌに共通にみられるのは注目に値する」としている。

名取武光氏によれば墓標にみられる×印（クワシロシ）について「余市アイヌの話に依れば，此のクワシロシに依って迷わずに祖先の所へ行けるのだと言ふ」また「主人が死んだ場合，ウケウトモイップと称してその妻を会葬者が打ち擲り踏みつけて気絶させ，醒めると又気絶させる（八雲・余市）。これはメッカ打ちと云って主人を失った妻女の悲しみを気絶の状態で忘れさせていくと置くと云う，途方もない思い遣りの心から行われるのである[38]」としている。また供養酒箸について「普通の神祈り（カムイノミ）の時用いる酒箸を裏返しして用いるか（浜益・日高・余市・長万部），又は特別に供養酒箸と称して刻み目（トクパ）のないものを造って用いる（近文）」とある[39]。

（14）狩猟・漁労

（a）狩　猟

熊狩について違星エカシは「余市付近の山で熊によって怪我をしてからは，絶対に余市付近では熊狩をしなくなり，却って樺太へ行くと熊狩をした。その理由を尋ねると余市付近の熊の家族に対して，何か自分の仕草が気に入らない所があったに違いないから，余市付近で熊狩をすると祟りが恐ろしい。然し樺太では熊の家系も異なっていると思うから，それ相応の神祈をして狩に出れば大丈夫と思うと云うのである[40]」としている。

昭和27年の座談会において「司会　Cさんは猟の方をやられているんだが今迄にどの位熊をとりましたか　C　わしは十六の年からおやじに連れられて，熊とりをはじめた。〆て二十頭とった。親父は名人だった。停車場の裏の湿地には鹿が居たと云う話で随分けものは居たからね」人食い熊のあだ討ちについて「あの仇とりにおらも行ったよ，何せ，雨が降ったんで足跡がわからない。仕方ないからアマッ砲しかけたね。二日目の晩に，鳴ったから，朝明けるのをまって行って見たら，たしかに当ったんだ。血こ一ぱい流れていたけど，姿はなかった」「司会　今時分堅雪になって，むじなど獲れませんか　C　一昨日二匹とった。　司会　大変簡単にとれるそうですがその方法は。　C　先ず足跡を見つける。そしたら穴をつきとめて，棒でつつく，その棒に仕掛けがある。先から三，四寸のところに針金で毛が，からみ付くようにしておく，棒を穴の中に差し込んで，手ごたえがあったら廻して，毛をからませて引っぱる。むじなは出まいと，がん張るから，ちょっと手をゆるめて前へ押す。すると油断をするからまた引っぱる。そうして次第に穴の口まで引きづり出すんだ。狸いぶし，と云う手も使ったりする。　A　皮は高価だ，肉は食う。司会　狸汁と云いますが，うまいものですか。　C　ちょっといける。今度とったらやってみることにするかね[41]」と記している。

（b）漁労

漁労に伴うこととしてメカジキ，クジラ，オットセイなどを狩漁するときに使用する離頭銛でキテと呼ばれているものがある。名取武光氏によれば「北千島・南千島・釧路・北見・忍路・余市を含む地方は，一般に体は長めで翼に表裏がなく，先金は多く鉄を用いる」として地方相について北海道の西南部と本州をA区，北海道と千島をB区（余市・忍路は西北部小区として銛体の稜線を重視している），樺太のC区に分けている[42]。

漁労とは言えないが，余市周辺に見られる鯨類について「アイヌがコタンを形成していた時代のヨイチの浜には，シャチに追われたクジラの類がヌッチ川沖のレプンゲ（礁）に乗ったり，ハルトロ（切り通しの下）・オプチャクナイ（浜中町のモイレ寄り）・オタノシケ（浜中町）などの海岸に打ち上ったものだ」との，地元アイヌの昔からの語り草が残されている[43]。

（15）交　易

古老の語るところとして「余市アイヌは大陸と交易していた。樺太から貰ってきたヨロイが2つもあった[44]。」と記している。

昭和27年の座談会において「A　どぶろくの原料は麦や，粟です。こめなんか無かった。子

供の頃は余市の河口え，弁財船之帆をはって，内地の船が来たもので，酒，こめ，ラッカ糖，などが積まれて来た。すべてが文化の匂いがしたね。それ弁財船が這入ったと云うのでみんな濱へ走った記憶ありますよ[45]」と記している。

(16) 天内山チャシについて

大正7年に河野常吉氏が余市の城址として報告され[46]，昭和45年に発掘調査が行われている。報告書には「アイヌの古い墓があるとのいい伝えにより，天内家では移住以来供物を行う習慣があり，現在において毎年お盆には山麓に供え物をしている」「祭り場との伝承があり，ここに参集する習慣があったとことを聞く[47]」と聞き取りを紹介している。また青木延広氏の調査によれば「古くフルカチャシ（丘の上のチャシ）と呼ばれており，ヲシトンプコツはこの丘の近くに60坪（約198㎡）の大きな住居（チセ）を構え，総乙名としてこのチャシを守っていたので同胞はこれをN氏のチャシと呼び，その言い習わしは昭和のN氏の代まで続いていたそうである」「N氏の家系はヨイチアイヌの名門である。その祖先は寛文九年の蝦夷の乱，いわゆる「シャクシャインの乱」の当時，乱の収拾に松前藩と渡り合った与市アイヌ三人の大将のひとりだと言われている。安政四年八月の林家文書に出てくる総乙名ヲシトンプコツはN家十代目に当り，十一代目トミシユシ（嘉永二年生）も総乙名を勤めている」としている[48]。

Ⅲ　ヨイチアイヌの特徴

ヨイチアイヌの伝統文化については大正時代頃に失われつつあり，現状として総合的な聞き取り調査は不可能となっている。しかし，幸いなことに違星，西村家の古老からの民族的調査が，戦前に河野・名取氏が主体となって行われ，最近では難波・佐藤・青木氏によって西村家の調査が行われたため，部分的ながら項目別に整理することができた。

整理して気づいたことは道南・道央部に余市が位置しているにもかかわらず，北方的要素が色濃く見られることである。

熊送りでは小熊の衣装についてポンパケとカムイニンガリを用いる風習があり，道東方面や樺太等の北方のアイヌ間に見られる特徴と共通している[49]。

キケウシパシュイについてはイクニと呼んでおり，樺太の呼び方と類似していることは他の地域とは相違している。

墓標の形態では河野氏の調査によれば東エンヂウ（樺太西海岸），西エンヂウ（樺太西海岸，北海道～手塩？・余市・松前付近？），シュムクル（北海道～八雲・礼文・有珠・小樽・札幌他），ペニウンクル（北海道～近文），メナシクル（北海道～幕別・伏古・浦河・白糠他、南千島）・サルンクル（北海道～静内・平取・千歳他）の6分派に分けられ，ヨイチアイヌは西エンヂウの代表的なものとしている。墓標はアシニと呼んでおり，「墓標にカムイシロシ様のシロシをつけるのは，私の知っている範囲内では西エンヂウのヨイチアイヌ，メナシクルの一部（T字型女標を使用するもの），アバシリアイヌ，シュムクルの小樽，浜益付近アイヌ，及びペニウンクルであるが，特に×印（ウタサシロシ）がこれ等のアイヌに共通にみられるのは注目に値する」と説明しているように樺太の影響があると考えられている。現在において墓地内のアイヌ墓標は消失しているが，西村氏が復元した男子墓標が水産博物館に保管されており，写真や記述を補う上で重要なものである。

死後の世界観についてシリパ岬の裏側に洞窟があり，アフンルパラ（死んでから行く道）の存在が知られている。死んだ最愛の妻を追いかけて男が洞窟にはいるとコタン（村）があり死んだ人々が暮らしている。チセ（家）に入ろうとすると「怖い，怖い，生きた人間が来た。決して家の中にいれてはならない」として灰を浴びせかけ，果てはイケマ（草の根，独特の呪）を吹きかける。何とかして入りたいとしてカムイプヤリ（神窓）に立った時，エカシ（翁）の声厳かに「お前は何たる不届者じゃ。此処は黄泉の国で生きた者の来る処ではない。死んだ人々が此の地に来て矢張生活するのじゃ。生きた人間の来るところではない早く帰れ」と叱られて帰ることが知られており，霊魂が不滅であることを知ることができる[50]。

交易については「余市アイヌは大陸と交易していた。樺太から貰ってきたヨロイが2つもあった」との聞き取りがあり[51]，ユーカラなどの伝承に見られるように場所の特定は困難であるが道北地方や大陸との関連を漂わせているもの

も多い[52]。

北方との関係は不明であるが青木・難波氏が調査された水産博物館収蔵のカムイギリの意義は多大である。それは従来北海道ではその存在すら知られていなかったもので現存する唯一のものだからである。かつて日本海沿岸に広く見られたとのことから，太平洋沿岸とは異質な儀礼が存在していたことが考えられる。

Ⅳ　おわりに

近世・近代における道南から道北地域の日本海沿岸はニシン漁による和人の進出が早くから進み，アイヌの人々は労働者の担い手とされ，和人との接触交流によって，伝統的な文化が失われていった。余市には下ヨイチ運上家の場所請負人を務めた林家の文書が大量に残されておりアイヌ民族との交易について知ることができるが，伝統文化の状況についてほとんど記録されていない[53]。したがって林家文書からアイヌ民族の伝統文化を推測しようとしてもすでに崩壊しているような観を受ける。しかし，近代から現代にかけての様々な記録を駆使してみると昭和20年代まではわずかながら，熊送りも行われるなど伝統文化が継承されていたことが判明した。

ヨイチアイヌの民俗について上述してきたように，北海道でありながらも樺太などの北方的な要素を多分に含んでいることが看取できた。特に葬制にかかわる墓標については西エンヂウに最も近いとされており，頻繁な交流，あるいは移住なども想定できるのではないかと思われる。

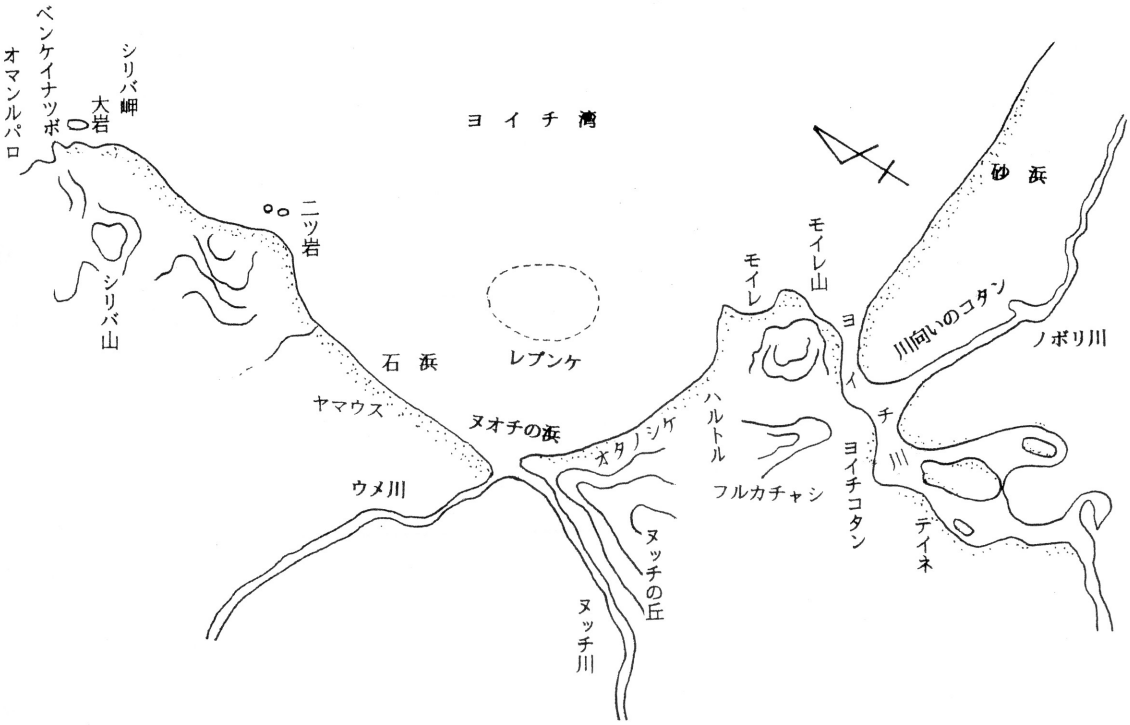
海保嶺夫氏は近世アイヌの政治的勢力において，寛文九年（1669）に起きたシャクシャインの戦いの記録から余市の総大将八郎右衛門について日本海を南下する中国産の商品を扱う中継ぎ交易に携わり，天塩・宗谷と密接な関係にあったことを指摘し，河野氏が墓標から西エンヂウと称した分布と関連することを論じている[54]。それはまた山丹交易による北方との交易と通じるところがある[55]。

考古学的に見た場合，余市町では中・近世の遺跡として大浜中，栄町1，大川，入舟遺跡等があり，いずれも日本海を望む海岸線の砂丘上に立地している。近年では余市川河口の大川遺跡が大規模に発掘調査され，中世から近世初頭の遺物として本州からは中国青磁・珠洲焼・漆器・和鏡・太刀等の遺物，北方からは青玉と呼ばれるガラス玉が大量に出土しており，交易品の動きを見ると北方と本州を結ぶ日本海交易としての一拠点として重要な位置を占めていたものと想定でき[56]，ヨイチアイヌの民俗事例はそのような時代背景による交流の頻繁さによって形成されたものと思われる。

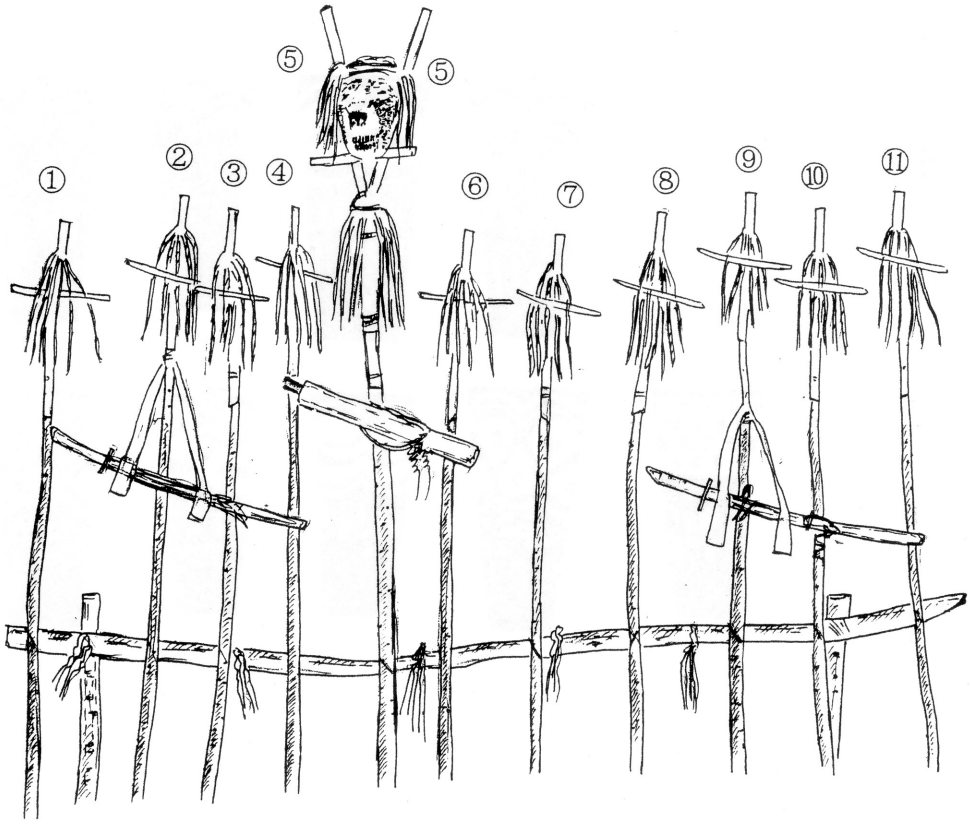
今回は本題ではないために伝説[57]などにふれることができなかったが，現在進めている聞き取り調査と併せて今後も文献調査を継続していきたいと思う。

小文をまとめるにあたり，筆者自身の文献調査では遺漏もあると思いますのでご教示を賜れば幸いと存じます。

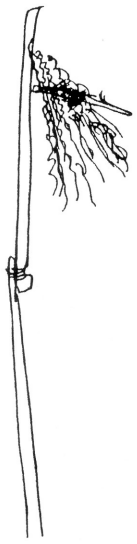
最後になりましたが，青木延広，近藤芳二氏には文献をはじめ，多くのご教示をいただきましたことに紙面をかりてお礼申し上げます。



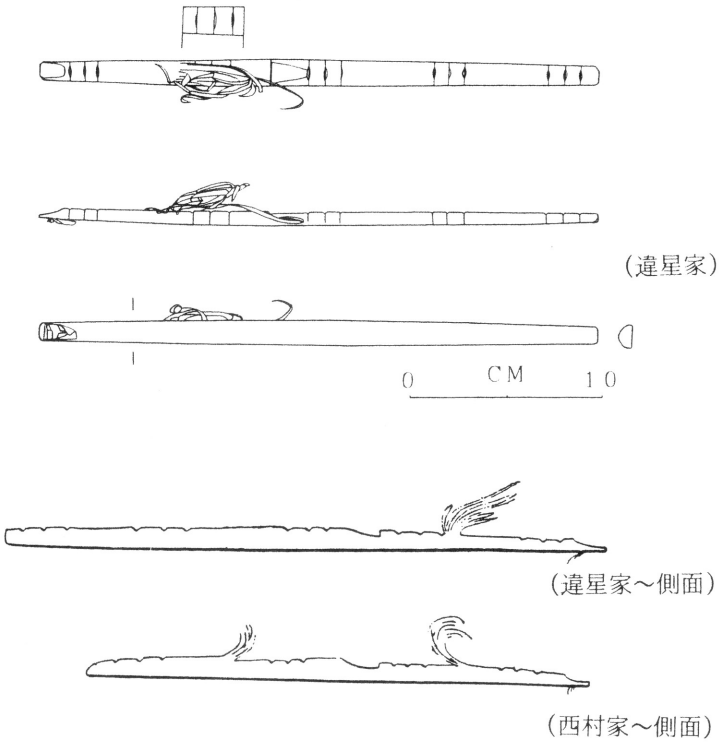
第１図　　ヨイチコタンの周辺（注 50b から作成したが掲載の番号は消去している）



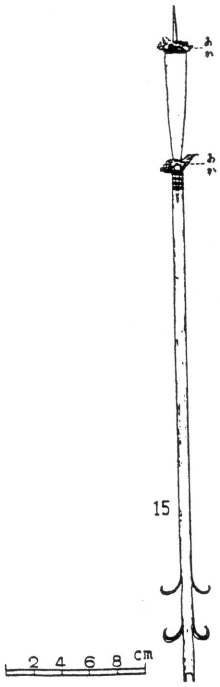
第２図　　カムイヌサ（注２４の写真から作成）



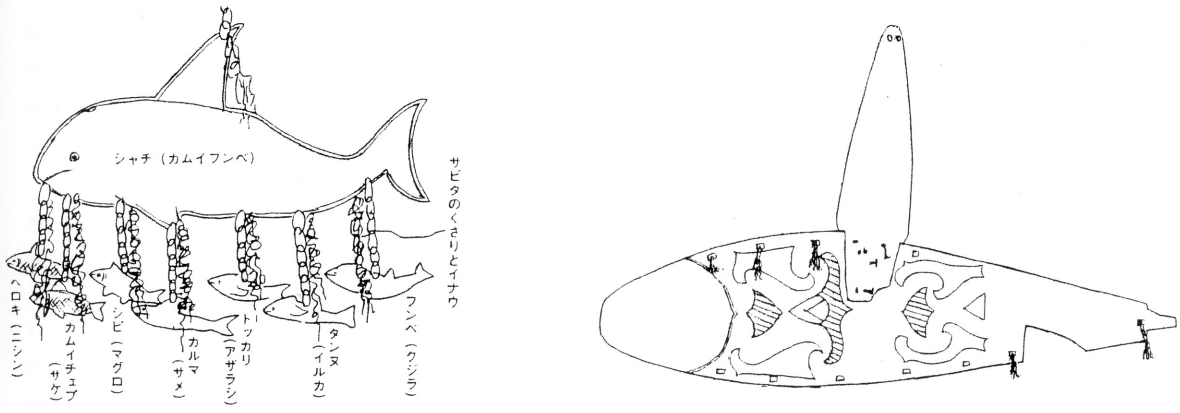
第３図　海神のヌサの
ギケチノエイナウ（注２５）



第４図　キケウシパシュイ
上段：児玉コレクション（注２６）
中・下段（注２７）

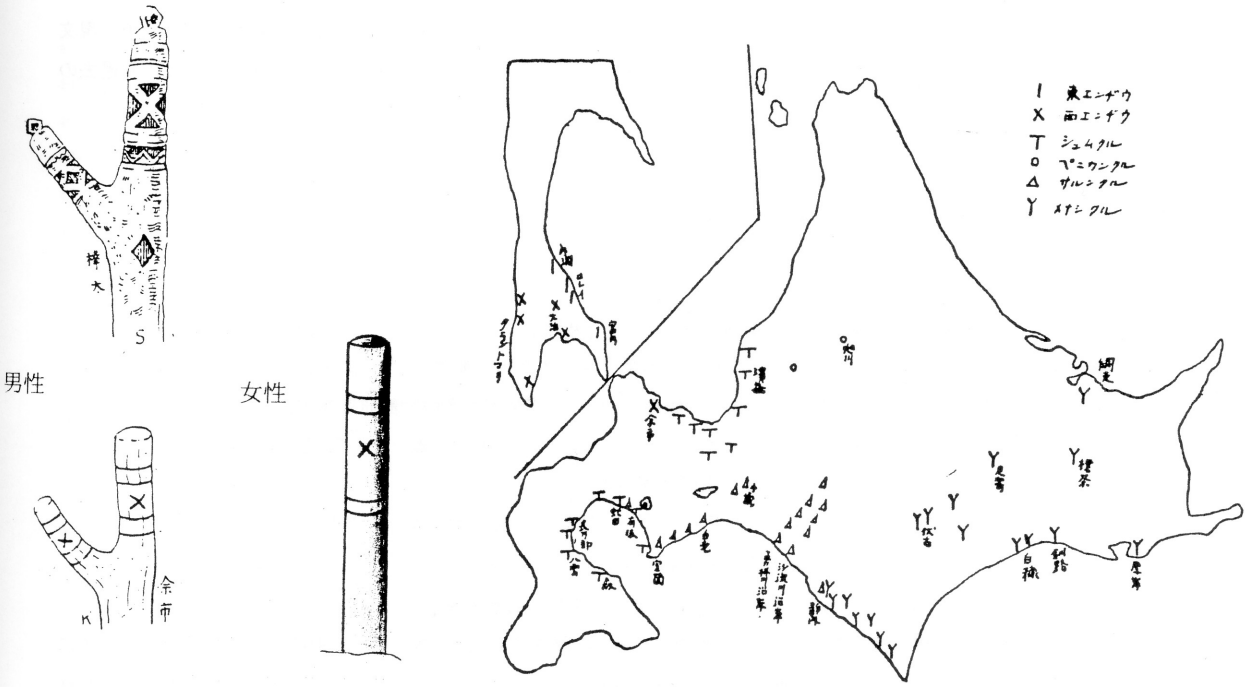


第５図　花矢と文様（注２３）



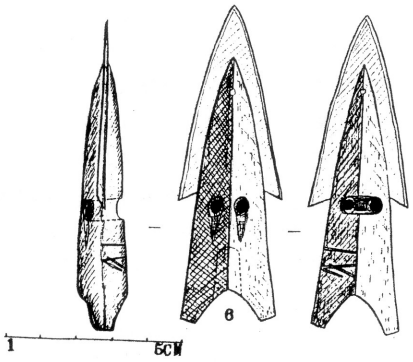
第６図　　カムイギリ（注９）

左：復元資料（水産博物館蔵）　右：実物資料



第７図　　墓標の形態と分布（注36・37）

第８図　　違星家蔵のイクパシュイと
キテのシロシ（注25）



第９図　　キ　テ　（注42）

＜脚注＞

1) 宮島　幹　1892『北行日記』(北海道郷土資料研究会　1958『北海道郷土研究資料８～北行日記』)

2) 小金井良精　1935「アイノの人類学的調査の思ひ出」『ドルメン』4－7

3) 違星北斗　1995『違星北斗遺稿～コタン』

4) 寺田貞次　1919「余市附近の土地と古代住民」『北海道人類学会雑誌』1

5) 北海道庁　1922『旧土人に関する調査』

6) 北海道庁　1933『北海道旧土人概況』

7) 余市町教育会　1933『余市町郷土誌』

8) 北海道庁警察部　1916『余市郡余市町旧土人衛生状態調査報告書』

9) a：難波琢雄・青木延広　2000「沖の神（シャチ）とカムイギリ」『北海道の文化』72

b：青木延広　1990「ヨイチアイヌの民俗カムイニリ」『北海道の文化』61

10) 注８と同じ

11) 小樽新聞　1914「巨人の跡」(6月9日)

12) 注８と同じ

13) 余市文化連盟　1952「余市アイヌの座談会」『郷土誌よいち』

冒頭ではその趣旨について「この町ではアイヌ人種と云う言葉は既に己に失われているものであろう。それ程余市町は蝦夷の地として古くから拓け、和人とアイヌ人との間は融和し混血された。それだけに余市の現文化は、アイヌ文化の研究なくして語ることは出来ないであろう。ここで、古老二名と壮年者一名に依り過去のことやら将来いかになり行くべきかについて語ってもらった」としている。

14) 注８と同じ

15) 注13と同じ

16) 河野広道　1931「アイヌの下帯」『北方時代』2-5

17) 注３と同じ

18) 小樽新聞　1914「巨人の跡」(6月9日)

19) 目黒幸男　1998「70年前の大川の街通りによせて」『草莽』

20) 小樽新聞　1937「熊送り唄も哀しく白雪に血の花～昔めく余市の熊祭り」(2月25日)

21) 佐藤利雄　2000「大川・入舟遺跡の歴史的概要について」『余市水産博物館研究報告』3

22) a：名取武光・犬飼哲夫　1939「イオマンテ（アイヌの熊祭）の文化的意義とその形式（1)」『北方文化研究報告』2

b：名取武光・犬飼哲夫　1940「イオマンテ（アイヌの熊祭）の文化的意義とその形式（2)」『北方文化研究報告』3

23) 名取武光　1985「第１部　アイヌの花矢」『アイヌの花矢と有翼酒箸』

余市・違星エカシ作（梅太郎の父73歳・昭和11年）の調査で完矢11本とある。補注において「違星作の花には，熊神と鯱神の神印として、両神の実体の図形が用いられていることは、家紋として最も原型に近いと思われる。また、花矢の格式によって、各部の寸法や赤布のつけ方などに、細かい差異と配慮が示されていることは、熊送りの作法が、よく継承されていることの現れであろう。花矢にこれほど、細心の配慮が払われているコタンは、他に見られない」としている。

24) 名取武光　1941「沙流アイヌの熊送に於ける神々の由来とヌサ」『北方文化研究報告』4

25) 青柳信克　1982『河野広道ノート～民族編』

26) 安田千夏　2001「児玉コレクション「キケウシパスイ」について」『アイヌ民族博物館研究報告』7

27) 河野広道　1933「アイヌのキケウシパシュイ」『人類学雑誌』48－7

28) 水島未記　2001「余市町豊浜の稲荷神社におかれていた鯨骨」『北海道開拓記念館調査報告』40

この鯨骨は現在水産博物館に保管されており，水島氏の調査によってシャチの頭骨と判明している。

29) 瀧川政次郎・島田正郎　1953「調査日誌」『余市』

30) a：注９と同じ

b：菊地勇夫　2002「石焼鯨について」『東北学』7

シャチについて近世文書にはカミキリと記されており，カムイギリとの呼称の共通性が窺える。林家文書にはカ

ミキリ，カモイクジラと記されている。

31) 注9と同じ

32) ライオン歯磨本舗　1928『よはひ草』

33) 注13と同じ

34) 注1と同じ：近世におけるヲムシャの伝統と思われる。
秋野茂樹　　1996「ヲムシャの一考察」『アイヌ民族博物館研究報告』5

35) 注4と同じ

36) a：河野広道　1931「墓標の型式より見たるアイヌの諸系統」『蝦夷往来』4
b：河野広道　1932「アイヌの一系統サルンクルについて」『人類学雑誌』47

37) 土佐林義雄　1952「アイヌ民族の墓標」『民族学研究』16-3・4

38) 名取武光　　1934「アイヌの土俗品解説」『どるめん』3-4

39) 注35と同じ：青木延広氏によればこの地方では祖先供養をシヌラッパと呼ぶという。

40) 注22と同じ

41) 注13と同じ　アマッ砲は仕掛け鉄砲と思われる。

42) 名取武光　1939「アイヌの原始狩猟具ハナレとその地方相」『東京人類学会・日本民族学会総合大会第3回記事』
（補遺については1972『アイヌと考古学』1を参照した）

43) 注9bと同じ

44) 注21と同じ

45) 注13と同じ

46) 河野常吉　1918『北海道史附図』

47) 余市町教育委員会　1971『天内山』

48) 注と9bと同じ
『寛文拾年狄蜂起集書』には「興市　同四拾間斗川へ舟入る　狄おとな八右衛門　ケブラケ　古城有　今に石場有り」とあり，「古城有り」の城は天内山チャシとの推定をしている。
藤本英夫・名嘉正八郎編　1980「天内山チャシ」『日本城郭体系』1
『寛文拾年狄蜂起集書』（1969『日本庶民生活史料集成』4に収録）

49) 乾　芳宏　1994「熊送り起源の一考察」『史峰』20
かつて筆者は北海道の熊送り（イオマンテ型）についてポンパケを使用するⅠ様式，使用のないⅡ様式に大きく分けたことがあり，余市の場合Ⅰ様式に相当するとした。

50) a：注3と同じ
b：佐藤利雄　1994「余市アイヌの昔話～コタンコルクルの伝承」『北海道の文化』66

51) 水産博物館に所蔵されているシントコ（行器）の中には鎧を収納したとする記録がある。収蔵されているシントコは全て曲げ物に漆塗りをしたものであり，日高地方によく見られる結桶に漆塗りのものは無い。恐らく，前者　は後者に比べて古い時期に搬入されたものと思われる。

52) a：金田一京助　1966「IYOCHIUNMAT(余市姫)」『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』Ⅵ
b：久保寺逸彦　1977「シヌタプカ媛の自叙伝」『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』
c：蓮池悦子　1996「ものがたるヨイチ姫」『北の青嵐』42
d：榎森　進　1982「ユーカラの歴史的背景に関する一考察」『北海道近世史の研究』
上記の伝承は余市町内で採録されたものではなく，日高地方で伝承されていたものである。
e：佐藤利雄　1993「余市アイヌ語地名考～ウメ川」『ひびけ』31
佐藤氏によればアイヌ古老の伝承として「今は大川町に住む同族の祖先がその昔ウメ川の上流域に住んでいて、イム・シル（巫術をする人）であったといい、またユーカラ・クル（ユーカラを語る人）でもあったという」と記している。

53) 余市町史編集室編　1985『余市町史』第1巻（資料編1）

54) 海保嶺夫　1974「第3節　近世アイヌ社会における政治的諸勢力の形成」『日本北方史の論理』

55) a：寛文十年（1970）にシャクシャインの戦いの際に，蝦夷地に派遣された津軽の隠密船の報告を記録した『津軽一統志』には「與市の大将四人　天塩大将一人　るいしんの大将弐人　そうやの大将弐人　大将計都合九人…此方の船へ見へ申し候得は衣装は名も不知北高麗織の色々唐草織付申候を着し候　衣類の見事成事言語不被述候」とある。この記述は中国の絹織物（山丹服）と考えられ，北方との交易を物語るものである。

『津軽一統志』（1965『新北海道史』7－1に収録）

b：中世の余市について海保嶺夫氏は『新羅之記録』から15世紀後半のコシャマインの戦時には和人が居住していたとし，14世紀初頭の『諏訪大明神絵詞』から蝦夷には日ノ本・唐子・渡党の三類がおり，余市は唐子に属するとしている。唐子は中国や樺太を意識したものとされ，この頃にはすでに北方との交流が行われていた可能性が高い。

海保嶺夫　1996『エゾの歴史』

同　上　　1987『中世の蝦夷地』

56) a：乾　芳宏　2001「余市川流域の中・近世遺跡」『北から見直す日本史』

b：同　上　　2002「海の民としてのアイヌ社会の漆器考古学」『考古学ジャーナル』489

57) a：北海タイムス社　1930「余市アイヌの伝説」『北海タイムス』（9月3日～5日）

突如王城を襲撃する一団（上）・神罰にふれ沖へ沖へと漂流（中）・自由の歓楽境を襲う怪物（下）を収録

b：佐藤利雄　1994「余市アイヌの昔話」『北海道の文化』66

あの世へ行って来た若者・地の果て・魔ものの話・月の話を収録

c：佐藤利雄 1999「余市アイヌのウパシクマ」『ひびけ』37

日高国沙流アイヌが余市を襲撃した話しを収録

d：余市町教育員会「伝説」『余市町郷土誌』

イヨチコタンの戦・尻場の洞窟・兜岩と蝋燭岩を収録

e：更科源蔵　1981『アイヌ伝説集』（『アイヌ関係著作集』1）

蝋燭岩・積丹半島を繋ぎ止めた蝋燭岩・シリパ岬の洞窟を収録

＜参考文献＞（50音順）

アイヌ文化振興・研究推進機構　2001『よみがえる北の中・近世～掘り出されたアイヌ文化』

アイヌ文化保存対策協議会編　1969『アイヌ民族誌』上・下

アイヌ民族博物館編　1989『アイヌ文化の基礎知識』

大塚和義　1995『アイヌ～海浜と水辺の民』

萱野　茂　1978『アイヌの民具』

菊池徹夫・福田豊彦編　1989『よみがえる中世～北の中世』

国立民族学博物館　2001『ラッコとガラス玉～北太平洋の先住民交易』

佐々木史郎　1996『北方からきた交易民』

佐々木利和　2001『アイヌ文化誌ノート』

杉山寿栄男　1936『アイヌ玉』

田端　宏・桑原真人　2000『アイヌ民族の歴史と文化』

北海道開拓記念館　1996『山丹交易と蝦夷錦』図録

北海道開拓祈念館　2001『知られざる中世の北海道』図録

北海道・東北史研究会　1998『場所請負制とアイヌ』

余市水産博物館研究報告第6号：25 - 34. Mar. 2003.

余市町豊浜地区の「ニシン漁労」民俗について（2）

－漁労作業を中心とした聞取りから－

浅　野　敏　昭

北海道余市郡余市町入舟町21（余市水産博物館）

Ⅰ はじめに

前号の報告では，余市町豊浜町に生まれ，同地に長く生活された久保田雷程氏から，大正末から昭和30年頃までの個人史を中心に，豊浜地区の集落の状況，民俗事例，特にニシン漁労に関わる同地区海岸の竈や干場などの諸設備，地区の年中行事や習俗についての聞取り調査を行なった結果について紹介した。

それは『ニシン漁労』に掲載された余市町関連分の民俗調査の報告では報告されきれないニシン漁労に関する伝承や事例が，聞取り調査によって新たに掘り起こされることを期待したものであり，結果としては，その期待以上のお話を頂戴したものと考えている[1)]。

小稿では前報告に引き続いて，平成14年度中に実施した聞取り調査によって得られた，同地区におけるニシン漁労の実態，具体的には漁場における漁夫の構成，ニシン漁開始前の諸準備，漁労の実際，使用された各船に積まれた諸道具，海上での作業手順などについて追加の報告を行ないたい。文中の敬称は省略させていただく。

(1)聞取り調査の対象漁場と期間

今回の聞取り調査の対象期間は昭和10年を中心とした約10年間，対象漁場は余市町沖村豊浜地区に漁場を持つ田岸家及び荒木家である。

小稿における聞取調査の対象期間は基本的には前報告と同じく大正末から昭和30年頃までの約30年間であるが，同氏の出征，昭和15年頃からニシン定置網漁と並行して久保田家が操業したマグロ大謀網漁において同氏が発動汽船の操船をされていたことなど，不在の期間があった。こうした理由から，ニシン漁労に関して同氏が実際に見聞き，経験し，それらを記憶している期間としては昭和10年を中心とした前後の約10年間程度という。

同氏が関わったのは荒木家と田岸家の建場であったが，お聞きした内容としては田岸家建場での事例が多かった。

前報告でも述べたが，久保田家が関わったニシン漁場について簡単に紹介すると，同氏の父久保田伝蔵は道南松前町から豊浜地区へ来住，小黒家の大船頭を務めた後，大正末には古平町田岸家経営のローソク岩から沖出される鰊定置網第9号建場の大船頭を務めた[2)]。

大正13年頃には次男源三が荒木家漁場においてニシン漁に従事，昭和初めには長男亮三が荒木家の「帳場」として漁場の経理を任され[3)]，同じ頃に続いて三男大三も荒木家漁場でのニシン漁に従事した。

昭和7（1932）年頃からは，荒木家の1統が久保田家に任され同家が実質的に経営，翌年頃からは四男雷程氏も荒木家の漁に従事した。

昭和19年頃には同家は建場を移し，余市町ワッカケ岬付近で操業，その後（操業時期不明）再びローソク岩の田岸家所有の第9号建場において操業を行なった[4)]。

久保田家が関わった漁場は，小黒家，田岸家，荒木家，田岸家と何度かの変更を見ながらも，大正から昭和20年代まで続いた。

(2)聞取り調査について

平成14年度の最初の聞取り調査は平成14年4月，久保田氏と共に豊浜地区へ赴き，前報告図表中の漁場建築や設備の位置確認などを実施，その後平成15年1月より漁労作業について聞取りを行った。

聞取りは漁労についての項目を予め用意し，ご自宅にお邪魔してそれらの質問項目についてお答え頂き，録音記録を実施した。併せて漁労に従事した各船の位置関係や作業の段階によって変化する位置等の共通理解を得るため，三半船や磯船，川崎船各船の紙型を作成してお話をお聞きする際の助とした。

Ⅱ 漁夫の来村と漁の準備

(1)漁夫の来村と構成

3 月初めには漁夫が来村した。荒木家は他漁場と比較して早く，漁夫が集まるのは2月22，23日頃であった。

田岸家雇用の漁夫は鉄道により余市駅に到着，余市川河口の茂入桟橋では田岸家所有の船が待機しており，それに乗船し豊浜へ向った。古平町田岸家には挨拶程度で，漁夫は豊浜の田岸家番屋に入った。

漁夫は南部の漁夫が27，28人程度来村した。ローソク岩付近の建場は水深が深いので，他よりは漁夫が多く必要であった。他に地元の漁夫が2人で30人弱の漁夫で1カ統を構成した。飯炊きは豊浜の女性2人と男性1人であった。1統を構成する漁夫30人中，最高齢は60歳位で，若い漁夫の監督役でもあった。

船頭などヤクビト（役職付の漁夫）は全て南部からの漁夫で，毎年来村する漁夫がほぼ同じだったこともあって，ヤクビトの編成は来村前から決まっていた。漁夫の役職を定めたサダメガキ（役職と漁夫の編成表）は障子紙に書かれ掲げられた。サダメガキの最初に漁場の番号，田岸家であれば余東定第九号と書かれ，その次に経営者田岸貞治，以下には大船頭，副船頭，船頭手伝，起船船頭と続いた。船頭手伝が起船船頭より偉かったが，それは各漁場によって違っていたと思う。続いて一般の漁夫，オカマワリ（陸廻り），最後は帳場の氏名が書かれた。

漁夫の雇用契約は，正月前に漁場の親方や帳場が契約のため東北に赴き，前金を渡して契約したが，漁期終了後の九一金の方が多いこともあった。

ある時，南部からの漁夫が，中学校を出たばかりだという15，16才の息子を漁場に連れ立ってきたことがあった。しっかり働くようその漁夫が息子に言ってきかせたところ，船のアカクミ（船底の排水），掃除，粕焚き用薪の準備など様々な作業を一生懸命やったところ，漁期終了時には最高額の九一金をもらったことがあり，親方以下のヤクビト達が息子の頑張りを見ていたからだと評判になった。

(2)漁具の購入・製造

鉄製の道具類は余市で購入した。かつては古平と余市とで半々の購入だったと思う。注文は前年の年末までに鍛冶屋に道具の種類，数量を予め決めて連絡しておいた。粕焚き用の釜は大型なので地元からではなく，内地から購入したものと思う。

木製の道具類は，通年で雇用していた2人の大工がその殆どを製作した。大型の道具は古平の田岸家で製作して豊浜まで届けられた。

船の製作は，豊浜のヤマシメ小黒家といった大きな漁場では船大工が複数雇用されており，こうした常時雇いの船大工が三半船や磯船の製作を担当した。彼等は前年夏に内地からスギなどの部材を購入し，船で運び込んで当地で製作することもあれば，内地で製作された新造船を持ってくることもあった。

網の購入は，網1反当たりの単価が決まっていて，それを何十間もの長さで購入して裁断製作した。網を採寸する時には，5尺で1間と計った。15尺で1反，網目は3寸目で50目だった。身網に使われた綿糸の号数は8～10号であった。網の号数は3本で撚られた各糸の撚る本数で号数が決まっていた。

ニシン漁では殆ど綿糸製の網が使われ，身網，垣網とも綿糸だった。綿糸は手触りが良く，波や塩にも強く，殆どの漁場で綿糸製のものを使っていた。

昭和10年前後だったと思うが，トワインが出回り始めた。トワイン製の網は太く不評で，ニシン建網には長く綿糸製のものが使われ，トワインが使われるようになったのはずっと後になってからのことだと思う。

(3)漁の準備

漁夫が到着した直後から雪割り，浜ならしが始まり，それらは漁夫のみでの作業であった。3月中旬には浜ならしまでの作業は終了し，型入れは3月15日～18日頃までで終了した。型の固定には石を入れた土俵を用い，漁期終了後は土俵の綱を切断し放棄した。

網入れは身網，垣網とも型入れ終了後3月20日頃から行なった。

金毘羅様を祭ったローソク岩のお堂を綺麗にする作業があった。時期は暦の上で大安で，かつ凪の日を選んで行なった。浜ナラシをしている頃でも日がよければ行なった。お堂はローソク岩の高いところにあり，高さはナヤ場のケタ木を2本使った梯子でなければ上がれない程の

ところにあった。岩壁に穴を穿って丸太を刺し込み，クサビとなる木切れを詰めて固定した上に祭られたお堂で，綺麗にする作業は例年同じ漁夫4～5名で行なった。

(4)網下ろし

田岸家の網下ろしの宴会は，各漁場それぞれで行なった。豊浜の田岸漁場で行なう時は，参加者は豊浜地区の親方など土地の顔役で，大人ばかりが集まり，余市の人は呼ばなかった。

豊浜の各漁場の網下ろしの日時は同じ時間に重ならないよう時間をずらした。網下ろしの宴会は同じ時期に集中するので，同じ日に宴会を掛け持ちすることもあった。

宴会は親方の訓示，船頭からの注意事項の伝達で始まり酒の席となるが，あまり酒が回らない頃合で胴上げをした。普通胴上げというと人が宙を舞うが，網下ろしの胴上げは着物を掴んで決して離さないもので，親方，大船頭，副船頭，帳場など偉い人は必ず胴上げされ，それは大変目出度い事とされた。

参加者の多い胴上げでは一般の漁夫は輪に加わることは出来なかった。

胴上げされる人が床に落ちて怪我をしないよう，輪の中心には屈強な若者が2人両手両膝をつき四つん這いに並び，万一の事態に備えた。しかし，日頃から憎まれている偉い人が胴上げされる時は何年かに1回は落とされることもあったらしい。

宴会に出される料理はその土地のもので，魚の刺身，煮ダコ，珍しい魚の煮付けであった。また必ず出されるのは，米1升からでも多く作ることのできない20 cmを超える大きさの白い大福餅が各席に5個ずつ重ねて並べたものがお膳に並んだ。皆は家へ持って帰ったが，漁を控え帰ることの出来ない南部の人達は，後々番屋で食べていたらしい。

Ⅲ 海上での作業

(1)ニシン漁の始まり

豊浜地区でのニシン漁の開始は，4月5日頃からだったが，3月中からニシンが来た年で大漁だったことがあった。

ニシン場の飯は早いと言われ，3時頃には夕飯の時間となった。3時30分頃には1統27～30名の漁夫全員が，三半船の起船，枠船，磯船に分乗し建場に向った。3～5人を枠船に残し，枠船の漕ぎ手は起船に移り，共に陸へ戻り待機，夕方に再度建場へ戻った。

(2)枠船の乗船人数と待機

枠船に残る待機の3～5人はヤクビトで，大船頭，副船頭，船頭手伝などで，陸との連絡用として使われる磯船には2人の漁夫が乗っていた。待機中の磯船は枠船に繋留され，磯船乗りの2人も枠船に移った。待機中は屋形を組み，その中で枠船3～5人と磯船乗り2人の計7人程度が寝た。サワリイトは起きている人が交替で持ったが，ニシンが乗網し，クチマエを閉じる判断を下すのは大船頭など腕の立つ漁夫であった。

網起しの前には屋形は解体され，それらは艫（とも）側のタチバの下に収納された。

(3)枠船の道具（図 1）

枠船に積まれた道具には，櫓，櫂（艫櫂含），屋形用の木材と莚，ストーブ，燈火用の鉄製のカゴ，角オハチ，おかず入れ，水樽，アンバイ棒，ヤシャカギを積んだ。

櫂は使わない時はしばってまとめ，タチバの下に収納した。

屋形は木で組み莚をかけて建てた。起船の屋形よりは幾分小型の屋形をドウノマに設け，そこで寝た。

ストーブは蓋がとれる型で汁物の煮炊きや暖をとるためのもので，ドウノマに置かれ，汁物の具となる魚は網に入る生きのよいものを料理した。

燈火のカゴは鉄製で，船の前後すなわちオモテとタチバに吊るされ，樺の皮を燃やし燈火にした。樺皮は後にはカーバイトに変わった。

角オハチはご飯を入れ，枠船には1個が積まれた。おかずはタクワン，スシニシンを積んだ。

水樽は飲料水用で，竹で作った注ぎ口がついたものであった。

アンバイボウ，ヤシャカギは沖揚の際に使用した。

(4)起船の乗船人数と待機

起船には15～20人が乗り込んだ。構成は起船船頭，平漁夫で，平漁夫の中で腕の立つ者はオモテとトモのクリコシ綱の係を担当した。

待機中は枠船と同様に屋形を組み，15～20人が狭い中で寝た。

(5)起船の道具（図 1）

起船に積まれた道具は，櫓，櫂（艫櫂含），屋形用の木材と莚，ストーブ，燈火用の鉄製のカゴ，角オハチ，おかず，水樽，アユミイタを積んだ。

櫂の収納は枠船と同じくタチバ下に収納した。

屋形は枠船のそれよりも大型のもので，同様にドウノマに組んだ。ニシンが乗網する頃には屋形を解体しそれらもタチバの下に収納された。

ストーブ以下，水樽まで枠船と同様に積まれていた。角オハチは2個だった。

アユミイタは網起しの際に起船の側面，身網側に渡され，これは網を起す際に力が入るよう足場を高くするためのものだった。

(6)網起し

ニシンは凪の日に乗網することが多く，待機中の夜の海上は対面する船の話し声が聞こえるほどであった。

サワリイトは網入れの時には既に結わえられていて，通常は大船頭が手にしていた。大船頭が休んでいるときは別の人が持ったが，サワリイトの感触で，身網に乗ったニシンの量を3杯から5杯の間で見極めることが出来るのが腕のいい船頭であった。

前垂網を引き揚げて結束し，口前を閉じるのは磯船乗りの仕事であった。

ローソク岩付近の建場で使われた身網は水深に対応した大きなものであったため，前垂網を閉めるのに手間がかかることから父伝蔵は新たな方法を考案した。それはガンタあるいはハッカと呼んだ環状鉄製の道具を口前付近に付け，そこに通したロープを枠船，起船双方から引いて前垂網を上げる方法であった。この方法を使えば，前垂網の大部分を引き上げた後に，磯船係が前垂網を結束するだけで済むこととなり，この方法は久保田式や伝蔵式と呼ばれ，後には他の漁場が真似をするようになった。

他にも父がヤマシメ小黒家の大船頭であった頃から考案した漁労作業の工夫が色々あったようで，自分が大人になった時に色々な場面で，年長者からこれが伝蔵式だと言われたことがあった。

網起し開始の合図となる船頭の「オコセ」の声が聞こえると一斉に網起しが始まった。

その都度「オコセ」の号令が掛かって枕にしていた前掛けを腰に巻いて作業を始めるが，動作が遅い者は古参の船頭に頭を叩かれていた。

後に出回ったゴム製の合羽ズボンは着脱に時間がかかり，また狭いドウノマに各自がゴム製の作業着を持ち込むと嵩張るので，現場では不向きであった。ゴム製合羽ズボンが出てきてからも，油を塗った木綿製の前掛けが使われていた。

網起しの際，オモテの係，トモの係は起船と枠船の間に渡されたクリコシと呼ぶ綱を調整する役目があった。この操作の判断を誤ると身網の上に船が乗り上げることになり，網起しが出来なくなる恐れがあったため，これは重要な係であって熟練を要した。

網起しの際，起船と枠船の距離を詰めてゆくには，船の前後に一重に結ばれたクリコシ綱を足で操作しながら結束部分を緩め，オモテとトモが枠船に対して平行のまま均等に進むように加減しなければならなかった。この調整がうまくゆけば係の漁夫の九一金が多くなったが，給料自体は平漁夫と大きな差はなかった。

網起しでは，キヤリが唄われた。長時間の作業は腰が痛くなるが，文句を歌っている間は休んだりしゃがんだりしていた。腰の弱い人は泣いた。

テガケを手にはめての作業は，素手でやれば1度起すだけで手の皮が剥ける程であった。

テガケは1網で3〜5回の網起しをすれば擦れて指が出てきた。漁に出る際に持つテガケは少なくとも2足，付替えが出来るユビは多く用意した。これらは家人に出来るだけ多く作ってもらうものであった。

網起しの終盤，枠網に落とし込む頃には，それまで3寸目だった網目が2寸目と小さくなり，糸も35号と太くなった。身網は殆どの部分が3寸目だが，セメの部分は網目2寸目，タテアゲ部分はトフシ（10節），或いはヤフシ（8節）の網目であった。トフシは網目5寸の間に結び目が10，ヤフシは同じく結び目が8つのものを指して言った。

枠網に落とし込む際，網のタテアゲやシキの部分に最も重さがかかるが，ここに重さがかかり過ぎるとタテアゲ部分が割けることがあった。それを防ぐため，タテアゲもシキも全部が2つに割れるような構造になっていた。

身網に乗網した魚群を網起しの手際が悪く殺

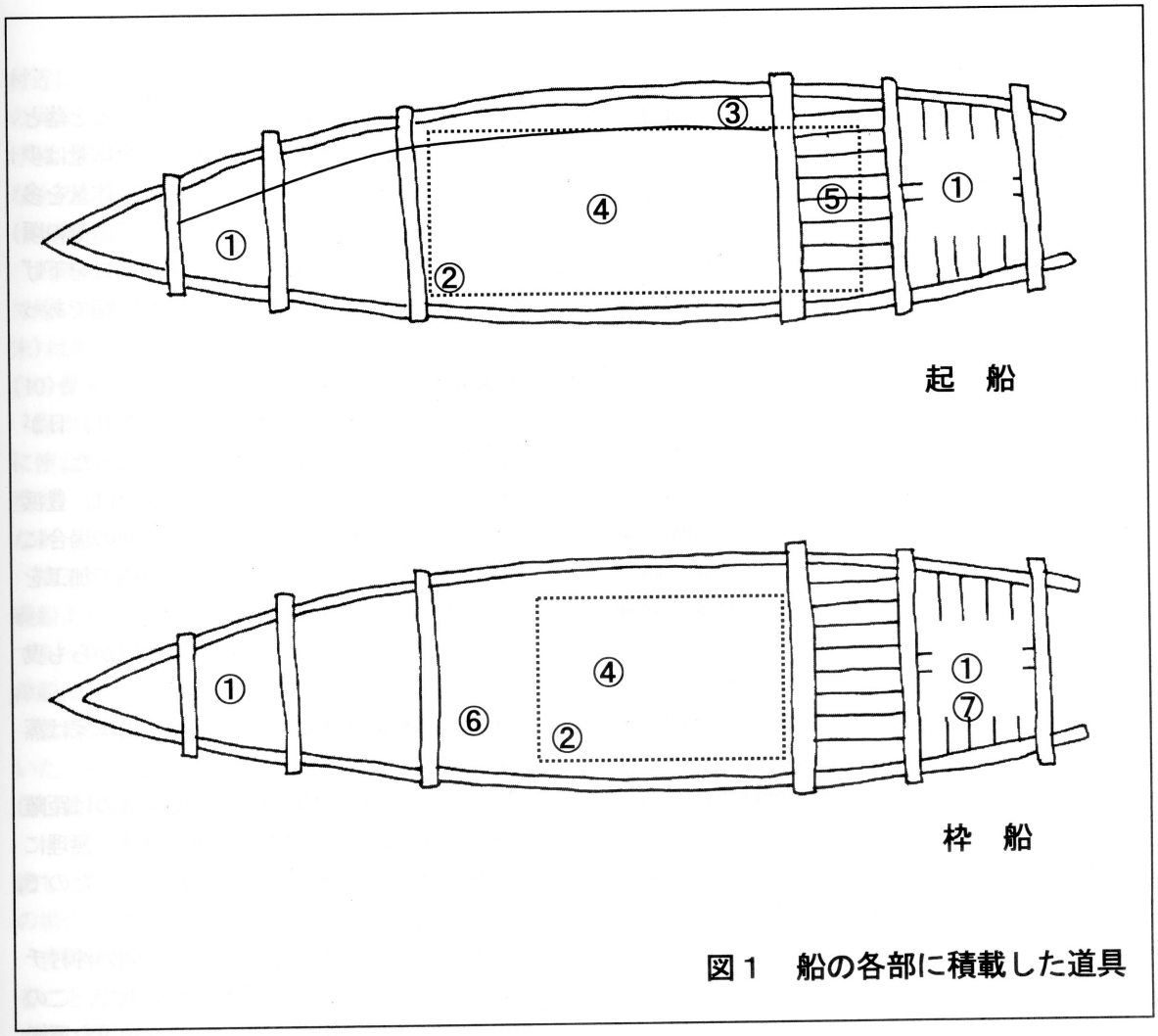


図１　船の各部に積載した道具

①燈火（鉄製の吊るしカゴ：後にカーバイト）

②ドウノマ：屋形組をする範囲

③あゆみ板（網起しの漁夫が立ち並ぶ範囲に板をわたした）

④ストーブと鍋

⑤タチバ：屋形の材や櫂を収納

⑥アンバイ棒とヤシャ鉤（アンバイ棒を多く積んだ）

⑦係留用碇

してしまった場合，網を分割させて放棄することがあった。三半船に10杯乗ると単純に計算して20,000貫もの重さになり，これを10〜15人で揚げるのは不可能であって，魚が海中で生きているからこそ揚げられるものであった。

身網の魚群を放棄する際は船頭の「ステレー（捨てれ）」の掛け声が懸かり，係がロープを操作し，シキ部分が分割された。

ガワ（身網側面部分）が3分の2程度に分割できる網を拵える人もいた。

魚群を放棄した直後から，分割した網を復旧させる作業が水際で行なわれた。分割するシキ部分はロープを調節することによって開閉出来る構造になっており，結び目をはずすと一瞬で割れるものであった。それら一連の作業も熟練した漁夫が行なった。

復旧された身網には群来が厚ければ続いて乗網するが，魚群の多少によって網起しの間隔や，身網に誘導する魚群の量を調整して，枠網に落とし込む判断を下すのも船頭の熟練の度合い，腕であった。

枠網に落とし込んである程度入った後は枠船を放し，すぐ横に待機していた代り枠に交替した。父がローソク岩建場で船頭をしていた頃，田岸家は代り枠を2杯用意していた。

(7)枠網

通常は10〜15回の網起しを行なった後，枠を放した。

普通は枠網には200石程度が入るもので，三半船の汲船1杯10石で20杯程度の規模であったが，ローソク岩付近は350石程度の網を拵えていた。

枠網はひとつの網に魚群を落とし込む開口部を3つ持たせ，船の両側が開口可能であった。

枠網を船に結わえるのはナヤ場で使うケタ材，ブチアミと呼んだ指1本分位の太さの麻製の網，シナ皮を使った。

ケタ材を船べりに1周させて枠を引っ掛け，ブチアミをシナ皮で固定して枠網は吊るされた。

かなりの漁獲があれば，枠船のオモテ側から魚群を落とし込んだ。

枠網は網全体を3分割するようにロープが入っていて，それで支えられ海中に吊り下がる格好になっていた。魚群を落とし込むには網口部分のロープを緩ませ，オモテ，トモ，ドウノマの順番で落とし込んだ。

網口を下げ過ぎて開口部を大きくすると落とし込むのは容易だが，枠網に入れる全体量は少なめとなり，逆に開口部を狭くして全体量を多めにすれば枠網が上がらなくなるので，その頃合を見計らい，魚群を入れ過ぎず，網口を下げ過ぎずといった判断を下すのも船頭の腕であった。

(8)沖揚

ニシンは夕方から乗網することもあり，日が暮れる前に2杯の枠を揚げることもあった。

田岸家9号建場で漁獲されたニシンは，豊浜沖から古平町沖村へ曳航された。大漁の場合には豊浜沖でも沖揚げし，豊浜田岸漁場で加工を行なった。

1番枠が早い時間に放されると海岸からも曳航される様子を見ることが出来た。

古くは川崎船が曳航していたが，田岸家は蒸気船古英丸を使用するようになった。

古平町沖村の田岸番屋まで曳航するのは距離が短くても，20〜30分では到着出来ず，無理に速く曳航すると枠網が破れる恐れがあったので，枠網の曳航には時間を要した。

汲船が古平で着岸するのは，古平側の沖村チャラツナイにあった田岸家番屋の前浜で，この海岸の山の上に干場があり，そこへ粕玉を運搬するにはトロッコが使われた。レールを敷いた軌道を用い，トロッコの牽引にはウインチを使っていた。

完全に暗くなってから乗網した場合には，船の前後に設けられた燈火の下で作業をした。

オオタモを持つ人は汲船側に立ち，ヤシャカギはタモを引揚げ，アンバイボウは船の間隔を保った。

オオタモを枠網に刺し入れる時，枠網の開口部は汲船舷側にからめてロープで固定した。開口部を上から見た大きさはさほど大きいものではなく，オオタモのタモ網部分が入る程度のものだった。

枠船，汲船が並んで沖揚げをする際は，なるべく陸に近い方がよく，波が少ない時に作業を行なった。

枠船には錨が積まれていたが汲船に錨はなかった。

蛸穴ノ岬側の海中，現在の湯内漁港の防波堤

付近にはシホンイワと呼ばれた岩があって，その丸太は三半船を繋留するためのもので，沖揚げ時に待機する船が繋がれていた。丸太は堅牢なもので，建網漁家ごとの所有であった。

(9)川崎船

川崎船は櫂８丁が積まれ，三半船よりも細くて短い船であった。小学校５，６年生の頃（大正末）は豊浜でも枠引きの川崎船が多く見られた。

(10)保津船

保津船は建網漁では使わず，刺網漁をする際に使われていた。それは三半船よりもかなり小型で，物を積むのも三半船の半分程度しか積めなかったと思う。

構造も三半船と違い，保津は底の平らな面が磯船よりは大きいが，三半船と比較すると小型であった。また，三半船はミヨシがあったが保津船はなかったのではないか。

豊浜では保津船は刺網漁家の木村家が使っていた。櫂は２丁だったと思う。

(11)漁模様の伝達方法

マネは昼間に掲げた合図で，ヒルニシンが乗網し，起船を直ちに寄越して欲しい時など緊急の場合に使った。

夜間乗網した場合，磯船を岸に遣して知らせることもあったが，船に乗らない年配の男性が１統に数人いて，彼等が漁模様を浜の各所に伝えた。夕方になり，ニシン乗網の気配がすると彼等は磯船に乗って各建場を見て廻った。

彼等のような人は全ての漁場にいて，夜間は浜にあった小屋内でストーブを焚き，馬鈴薯を煮たりして食べながら待機していた。サダメガキには氏名は載らない「ヒヤメシグイ」の人達で，2～3日に１度は各自の漁場の親方からニシンを現物支給されていた。

Ⅳ 陸上での作業

(1)モッコ背負い

夜明けからモッコ背負いが始まった。出面で雇われるのは豊浜の人達のみだったが，春のニシンの時期には，タビノヒトが集落の各家々に3，4人は滞在していた。

ニシンの陸揚げが始まると，とにかくモッコ背負いに集中した。

出面の日雇い賃は現物支給で，その日に三半船で何杯揚がったかの漁獲高でニシンの量が違った。

前夜のうちから集落の各家では，何処の漁場の漁獲が多かったかを皆が調べていて，自分が出面に行く予定の漁場の狙いをつけていた。

各漁場の帳場は 5×7 cm程度の木札に各漁場の屋号が焼印してあるものを持っていて，それを鑑札がわりとした。出面の働き手であった地域の男女は，漁獲の多そうな漁場の木札を我先に手に入れようとした。

(2)ツブシ

早朝から作業が始まった。ツブシの作業にはノルマがあり，１日１人８本であったのでニシンにすると8000尾強のツブシをこなし，手際のよい人は追加で２本足し，その分の出面賃が高額になった。

ツブシ作業をする人は殆どが女性であった。

(3)尻ツナギ

尻ツナギの作業は男性が主に行なった。それは尻ツナギ専門に雇われた出面の働き手か，漁の終った若い漁夫で，漁夫の働きは九一金の額に反映された。

１連22～23匹を天秤棒にカギのついたものの片方に10連も20連もぶら下げて運んだ。

(4)粕焚き

粕焚きも早朝から作業が開始された。加工品としては最後の製造作業だった。釜２個で１組で，そこに男性２人組で作業を行なった。忙しくなれば釜２個の作業を１人で担当した。ロウカからニシンを運ぶのは，通常のモッコより大型の釜焚きモッコを使って運んだ。

煮上がりを失敗して生のまま搾れば，悪い粕となった。

(5)袋澗

豊浜の袋澗は古平町種田家のもので，古宇地方の袋澗と違って袋網の貯蔵場所としては使わず，沖揚中に遊んでいる汲船を待機させるためのものであった。種田の浜もあったが，大漁になって陸揚げする浜が手狭になった場合に利用されていた。

(6)ニシン製品

豊浜の田岸家漁場は水揚げしたニシンの多くはニシン粕を製造し，身欠製造は少なかった。多くは粕製造であった。粕干場は新トンネルの上方にあった。

大漁になった場合には，豊浜でも身欠として加

工した。

V まとめ

以上，昨年に引き続き久保田雷程氏にご協力頂いた聞取り調査の結果を報告した。以下に若干の補足と今後の課題を述べたい。

(1) 余市に到着した漁夫の一行は，余市川河口の桟橋から田岸家所有の船に乗り込み漁場へ向ったとのことであった，これは『余市町郷土誌』によれば「茂入桟橋」は大川町165番地に位置し，小原楠次郎氏の「築設」により大正14(1925)年に竣工した。木造，長さ35間，幅10尺とある[5]。

田岸家所有の船についてであるが，『古平町史』には枠を引いた総トン数97tの古英丸の写真が掲載される。田岸家所有の枠引きの船は古くは川崎船が，後には気船が使われたが，漁夫を運ぶ際にはこれらの船が使われたのかもしれない。

(2) 漁場の信仰についてであるが，久保田家が祭った金毘羅様の祠はローソク岩の梯子をかけなければ登れない上方に位置していた。これは昭和3年に撮影された写真資料（町内個人蔵）に見られるローソク岩基部の祠とは別のものであり，ローソク岩には同じ時期に2個の祠が祭られていたことになる。

(3) 網具はニシン漁においては綿糸製の網が長く使われていた。

網具の材質は国内産の麻から，輸入増を背景とした綿糸製のものに代ったが，同時にトワイン（マニラ麻糸）による網具も増加した[6]。豊浜地区においては綿糸製の網具が先に導入されたようで，後に流通したトワインは綿糸と比して，久保田氏の言葉にある如く建網漁にはその太さから不評であった。トワインは張りの力が強いこと，腐食しにくいことといった利点があったが，その太さの他に糸が硬く網地用に仕立てるには注意を要するものであった[7]。

(4) 船の名称についてであるが，今回の聞取調査では川崎船，三半船，保津船，磯船の名称が使われた。

豊浜地区で見られた川崎船は三半船に比して小型のもので，漁期に来村し枠の曳航を行なったもの，あるいは同地区への荷物の運送を担ったものの2者があった。

そのひとつは前述した通り，枠引きに用いられた川崎船で，大正末には川崎船が田岸家所有のもの以外にも同地区で用いられていた。

もうひとつは物資運搬の川崎船であった。それは昭和56（1981）年から実施された北海道教育委員会によって行なわれた北海道民俗文化財調査の豊浜地区関連分において報告された運送用船としての川崎船であって，トカイセン（渡回船）と呼ばれた運送業者が豊浜地区の商店への商品の運送，地区住民が背負って運ぶことの出来ない大きな荷物の運送などに，「3 反型」，「5 反型」の川崎船を用いていたことが聞取りによって調査されている[8]。

三半船は起船，枠船，汲船として用いられ，保津船は三半船に比して小型で，その構造や積載量には明確な相違があり，豊浜地区では保津船は刺網用の小型の船であった。

『ニシン漁労』に見る船型では熊石町，北桧山町，小平町の3町調査分において，船型の分類を見ることができる。

熊石町と北檜山町では，三半船は舳先（ミヨシ，舳先の突出部）が有り，建網に使用する6～7人乗りの船を指し，保津船は舳先が無く，建網漁と刺網漁の双方に用い，3～4人乗りの船を指すとある。

小平町では，明治40年代から川崎船がニシン漁を含む「沖漁業」に使用されたとあり，三半船，保津船両方の名称は見られない[9]。

留萌市でも三半船の名称は使われず，ニシン建網漁に用いられた船は専ら保津船と呼ばれたものであったが，その規模は小稿でいう三半船と同様のものであった[10]。

浜益村では道南方面から購入した三半船（舳先が突出する船）の舳先を切断し，保津船と呼びニシン漁に用いた[11]。

また大正年間，三半船は殆ど製作されなくなること，刺網漁の船であった三半船，保津船がやがて定置網漁に用いられることとなり，船型が大型化していったという指摘を見れば，小稿における三半船という呼称の使用は旧型の船をその呼称と共に長く使用していたものであろうか[12]。

三半船，保津船の名称使用は一見すると地域による差異のように見え，名称使用の地域分布は積丹半島東側に境界線を引くことが可能とも思えるが，或いは各地域，集落の成員構成の時

期やその出身母村によって名称使用の分布は複雑なモザイク状になるかも知れない。

(5) 大正から父久保田伝蔵氏が携わったニシン漁は継続され，息子達の世代には古平町田岸家と余市町荒木家が所有した漁場の建網漁に引き続き従事した久保田家であった。この時期は全道的な歩合制経営への移行，ウインチ使用による運搬や枠曳航の汽船使用といった動力の導入，輸入トワインやゴムなど網材や作業衣に新たな材質の登場が見られた時期でもあった。同時にニシン漁獲に翳りが見え出した頃で，ニシン産品の高価格化や歩合制経営による経営転換などといった漁家の努力が重ねられるなど広い地域でニシン漁家を取り巻く環境が大きく変化しており，今回報告した久保田家の事例においては他漁家のニシン漁に参加しながらの鮪大謀網漁の自家経営という経営の複合化，後には経営転換が見られ，久保田氏が見聞，経験された豊浜地区におけるニシン漁労はこうした激動の時期のものであった。

筆者はこれまで主に明治以降を対象として，漁業権を所有した建網漁家，すなわち漁獲の多くを同町市街地の浜中町で処理した川内家と，大船頭として活躍した父を持ち，帳場や役付の漁夫として漁場の中核を担った漁家すなわち小稿で報告した豊浜地区，久保田家の事例を調査してきた。今後も，刺網漁家や前貸，所謂「仕込」を行なった海産物商といったニシン漁家の他形態の個別事例を集積し，比較検討などについての調査報告を行なって参りたい。

小稿を終えるにあたり，北海道開拓記念館山田健氏，(財)北海道開拓の村　黒川郁氏，留萌市教育委員会　福士廣志氏，同　高橋　勝也氏，余市町　佐藤利雄氏の各機関，個人にご協力，ご指導を賜りました。記して感謝します。

また久保田雷程氏には昨年に引き続いての調査にご協力頂き，丁寧なお答えを頂戴しました。ここに深く感謝いたします。

<脚注>

1) 平成14（2002）年　浅野敏昭　『余市水産博物館研究報告第5号』「余市町豊浜地区の「ニシン漁労」民俗について」　P. 23
昭和45年，北海道教育委員会から刊行された『日本海沿岸ニシン漁労民俗資料調査報告書』で報告された余市町関連分は13名の話者からの聞取り調査結果であったが，紙幅が限られたのか漁労の具体的な作業手順などは知り得ることができない。

2) 平成元（1989）年　山田　健　『北海道開拓記念館調査報告　第28号』「余市地方における鰊定置漁業権の変遷－『免許漁業原簿』の内容を中心として－」　P. 73
余東定第9号建場は大正2年12月29日，古平郡古平町大字沖村11，田岸貞治漁業権所有者となる。古平町沖村は余市町豊浜地区と，蛸穴ノ岬を挟んで隣接していた。

昭和52（1977）年　古平町史編さん委員会　『古平町史　第二巻』　P. 359には「鰊定置漁業他郡進出」として，古平町沖村田岸貞治が「余市郡ローソク岩」に余東定第九号」漁場において着業したとある。田岸貞治は古平郡内には6統を持った。

3) 前掲2）　荒木家の漁場は昭和初期には余東定第2号建場，同第3号及び第14号であった。このうち第2号と第3号が余市町沖村字チャラツナイに位置し，第14号は豊浜地区の東方の字シュマドマリ（島泊）に位置した。

4) 前掲2）　昭和初期から余市町字ワッカケには，第21～23号の3ヶ所の建場があり，第21号及び23号は奥寺家，第22号は猪俣家の所有であった。この頃には余市町でも歩合制経営で操業する漁場があるが，久保田家がそれに携っての操業かどうかは不明であった。

5) 昭和8（1933）年　余市町教育會　『余市町郷土誌』P. 168　定期航路が余市，古平，美国へ，不定期航路が樺太，余市，小樽，礼文へ向けて運行していた。

6) 平成14（2002）年　田辺　悟　（財）法政大学出版局『ものと人間の文化史　106　網』　P. 66
同書中P. 56には『日本水産補採誌』に見る麻糸から綿糸に至る経緯を北海道における藁製の「ミゴ縄網」に関する記述も含めて見ることができる。

7) 昭和11（1936）年　坂本福太郎　『建網の手びき』　P. 8

8) 昭和56（1981）年から2年間にわたって聞取り調査が行なわれた北海道民俗文化財調査の調査員であった余市町　佐藤利雄氏の調査記録からご教示を頂いた。

9) 昭和45（1970）年　北海道教育委員会　『日本海沿岸ニシン漁労民俗資料調査報告書』　P. 134
昭和10（1935）年　北海道水産協会　（昭和52（1977）年　北水協会編）　『北海道漁業志稿』　P. 42に「「保津船」（第四図丙）其構造三半と異なる事なく、只「ミヨシ」を欠くの差あるのみ。」とあり，三半船と保津船の相違点について，「ミヨシ」の有無が船の規格以外での明確な相違とされてきた。

10) 平成7（1995）年　留萌市教育委員会　『留萌市文化財調査報告　留萌市ニシン漁撈調査－留萌市礼受地区のニシン漁撈を中心に－』P. 290　「第3節　カクダイ佐賀家漁場の漁船について」

11) 昭和20年代後半頃にニシン建網漁の船頭職を務めた浜益村　土門勉氏のご教示による。

12) 昭和56（1981）年　山田健　矢島睿　丹治輝一　『北海道の生業　2　漁業・諸職』　P. 30

昭和32（1957）年　北海道水産部　『北海道漁業史』　P. 671には，「本道の鰊漁業が大正・昭和時代における漁獲の減少にも拘らず依然として旧来の漁具・漁場を存続せしめ得たについてはこのような歩合制の採用によって危機の転嫁をなし得たことがあずかって力あったこと思われる。」との指摘がある。これはまた歩合制への転嫁によって危機を回避したことが，旧来の漁具・漁法を継続し得たことでもある。漁場の北上とともに漁具の北上を見せたことは北海道日本海側で聞かれることで，道南の三半船が，道央・道北で保津船あるいは川崎船と名称を変えて使用されていたことは興味深い。

余市水産博物館研究報告第6号：35 - 44. Mar. 2003.

「畚部洞窟古代彫刻の考察」奥野義扶氏の未完遺稿より

浅　野　敏　昭

北海道余市郡余市町入舟町21（余市水産博物館）

Ⅰ　はじめに

1950（昭和25）年に発見されたフゴッペ洞窟は，翌1951（昭和26）年からの2次にわたる発掘調査後，1953（昭和28）年11月14日，岩面刻画の残る洞窟遺跡として国指定史跡となり，木造の覆屋による保護措置が講ぜられた。その後，新たな保存工事を行なうこととなり保存施設改修前の1971（昭和46）年に洞窟前庭部を対象とした第3次の発掘調査が行なわれた。また2001（平成13）年と翌2002年には，現在進行中の保存調査に関わって洞窟北側敷地の遺跡範囲確認を目的としたトレンチ調査と，1971年に発掘した前庭部の更に東側を範囲とした発掘調査を行ない現在に至っている。

こうして発見から現在まで5度の調査が行なわれ，多くの研究者や地元町民などの協力により多くの考古学的成果が得られた。1951年と1953年の発掘調査の成果は1970（昭和45）年に『フゴッペ洞窟』（フゴッペ洞窟調査団編）として刊行され，同書には付図としてフゴッペ洞窟岩面刻画の1/10実測図（以下，実測図）が添付された。

余市町教育委員会文化財課は1951年，1953年の発掘調査に参加し，現在は故人となった奥野義扶（よしお）氏が遺された「畚部洞窟古代彫刻の考察」と題した一連の原稿とフゴッペ洞窟の発見当時の写真，岩面刻画の計測と模写に関するスケッチなどの諸資料（以下，奥野資料）を遺族のご好意でお借りする機会を得た。

『フゴッペ洞窟』付図は，同洞窟岩面刻画に関して現在まで唯一の実測図であり，その作成過程や発見当時の状況を知り得る資料を見ることは，岩面刻画保存の観点や研究史上，貴重なものと考えてのものであった。

今回お借りした資料は，B4版西洋紙のスケッチ9点（内1点は表裏に作図），ノートに描かれた模写図及び計測図42点，便箋に記された模写図集計表19点，写真29点（内10点は手宮洞窟陰刻画），原稿用紙27点の計126点であった。

これらは残念ながら実測図にある刻画全てを網羅したものではなく，記された刻画や計測図及び模写図や模写図集計表のメモ等からは，実測図作製の全ての過程や状況を明らかにすることは出来ないが，当時の写真や実測図作成の基礎資料となったであろう模写図などを紹介し，刻画の計測・模写をされた奥野氏が発見直後の岩面刻画をどの様に観察したのか，これら諸資料を通して考えてみたい。

Ⅱ　第1次発掘調査に参加した奥野義扶氏

奥野氏は発掘調査が行なわれた1951（昭和26）年当時，小樽商業大学2年次に在学中で，日曜日毎に母校小樽潮稜高等学校の教師であった中村諦二氏や他担当者と共に岩面刻画の計測，模写の作業を行なったとされる。その後家業を継がれた奥野氏は1969（昭和44）年，37歳で他界された。

『フゴッペ洞窟』によれば奥野義扶氏は後藤三郎氏，小野弘氏と共に写真撮影を，樋口忠次郎氏，桐谷賢一氏と共に彫刻模写を，また桐谷賢一氏と共に石膏型造形を担当された[1)]。

同書中には調査の経過として，奥野氏，桐谷氏両氏が「岩壁彫刻」に関した作業において中心的人物であったこと，奥野氏が洞窟丸山の外壁に類似の刻画やその痕跡を確認したことが述べられており，奥野氏は調査団メンバーの中でも「岩壁彫刻」の担当者として精力的に調査に従事したことが見て取れる。同様に実測図作成の経緯も記され，そこには奥野氏が彫刻模写を行ない，その模写を基に桐谷氏が1/10の「集成図」を作成するという手順で作業が行なわれたとある[2)]。

裂を表現しているもので，北壁奥部最上段のスケッチが1点，南壁のスケッチが7点，手宮洞窟の岩面刻画のスケッチが1点である。フゴッペ洞窟のスケッチには各出土年，つまり発掘作業によって土砂や遺物が除かれ刻画が露出した時期を示す注記が見られる。

（模写図及び計測図）

模写図及び計測図は42点であった。B5版ノートの見開き左右に刻画の計測図及び模写図が其々の担当者の名と共に付される頁，計測及び模写の別が不明で奥野氏のイニシャルと思われる「YO」とローマ字が付される頁，フゴッペ洞窟の刻画を分類した頁，手宮洞窟の岩面刻画のスケッチが描かれた頁で構成される。また後に述べる刻画実測図を作成する過程における図の修正作業も「YO」すなわち奥野氏が行なっている。

西暦年の後にローマ数字とアラビア数字を組合わせた番号が「1954 - Ⅷ - 29」の如く描かれる頁が14頁ある。これは発掘調査が終了した時点において，単一の刻画或いはグルーピングした刻画群に番号を付したと考えられる[3)]。番号を付した刻画群では，南壁部分の楕円の刻画が連なる部分，50点弱の刻画群に番号が付されているものが最多である。刻画群のグルーピングは奥野資料中の写真にも壁画を区画したものがあることから窺うことが出来る。

これらの刻画群の模写図及び計測図作製にあたって，計測作業は中村氏と奥野氏が，模写作業は樋口氏と奥野氏が担当したことも見て取れる。

模写及び計測された刻画（群）の内訳は南壁11点，最奥部4点，北壁10点，不明2点で，その位置を洞窟の構成壁で見れば，南壁の上段と下段，北壁の上段，最奥部ではほぼ全ての部位にあたり，北壁の最も外側（東側）の「魚と漁労装置？」と称される刻画も含まれていた。

（模写図集計表）

便箋に描かれた模写図集計表は19点であった。その1葉目には調査が開始された1951年から1954年までの岩面刻画の模写図及び計測図の集計作業を窺わせる記述が見られる。その中には「1951年　Ⅸ - 3」の如くローマ数字とアラビア数字の組合せで11個の番号が縦に連なり，筆算の合計で「確定11回　推定21回」と記され，以降も同様に「1952年～略～14回」，「1953年～略～5回　その他石膏トリ」，「1954年～略～20回」と続き，最後に「計測図64枚　模写図18枚」との記述が見られる。

多くの図面が作製されたことは，桐谷氏の「フゴッペ洞窟発掘の頃」に，小樽から自転車で通い「洞窟の主の様」に「詳細を極めた模写」を行なった奥野氏が，原寸の図を「膨大」に作製したとあることからも窺える。

以上に述べたスケッチや計測図及び模写図，集計状況は前述した如く，実測図にある刻画の全てを網羅したものではなかった。これら一連の資料が奥野氏の担当した作業範囲であるとすれば，その分布や刻画の状態から推察すると，氏が担当されたのは洞窟上部や最奥部の狭い場所で，計測或いは模写の作業をするのには制約があり，またそこに存する刻画も一部の剥落や岩壁の亀裂と重なった部分で画像形態を判断するのに比較的困難を伴うものだったと思われる。

Ⅳ 写真

写真資料は29点（内10点は手宮洞窟陰刻画）であった。これらを洞窟構成壁の部位別に見ると，南壁3点，北壁11点，南壁の実測図面1点，最奥部の実測図面2点，北壁の実測図面2点である。これは各壁の計測図及び模写図の範囲とほぼ一致し，氏は写真資料と計測図及び模写図とを照合させる作業をこれらを用いて行ったものと考えられる。

また撮影された実測図面はトレース用紙に鉛筆で作図したもので，その内の1枚には刻画の切削面の角度や深さなどが記入されたものがあった[4)]。

南壁を撮影した写真1には，右上方の岩壁に4本の白色テープが見られる。これらは4本ともほぼ均等に岩壁に貼付されているように見え，刻画を実測する際の基準線と考えられる。湾曲の複雑な岩壁面に描かれた刻画を実測した手法が如何様であったかについての記録は確認していないが，基準線を用いた遣り方測量の手法を用いた計測を行なったのではないであろうか。

写真2は南壁上方の楕円状の刻画が連続する部分を撮影したもので，番号を付したスケッチの各区とほぼ対応する。

Ⅴ「畚部洞窟古代彫刻の考察」

原稿は27点（枚）であった。「畚部洞窟古代

彫刻の考察」（以下，「考察」）と題し，3度の推敲を重ねたものも含め8点（枚），「畚部洞窟古代彫刻の分析」（以下，「分析」）14点（枚），「第章　手宮古代文字の分解」と題し章番号が空白の原稿5点（枚）である。

「分析」は「考察」の文中に同じ表現が見られるので，「分析」を発展させた論考が「考察」になったものと推察される。

「考察」は「序論」，「一　場所」，「二　発見発掘経過」，「三　包含層」，「四　包含層の考察」，「五　遺物　A　自然遺物　B　人工遺物」，「六　遺物の考察」，「七　彫刻」，「八　彫刻の考察」まで，8つの章からなる構成を氏は考えていた様であるが，「第一章　序――分解の方法について――」と「本論」の草稿が残されているだけであった。「本論」には文章の他に刻画を分類したスケッチも適宜挿入され，刻画を「全壁面」をひとつとして考え，各刻画を把握しようとしたことが見て取れる。

「本論　三」の「分類別の分解」にある「P、～数字～」は模写図及び計測図が記入されたB5版ノート後半部のフゴッペ洞窟の刻画を分類した頁に対応しているが，ノートの分類別模写図は「P、10」までのみであった。

以下に未完ではあるが，同論文を掲載する。「本論」は「考察」の章立てには見られないので，「分析」のひとつの章と思われるが，刻画の詳細な描画とそれを分析する文章が記載されているので，序論に続いて掲載する。

文中，判読出来なかった字句は○○とし，句読点と改行は基本的に原稿通りとしたが，文章中に刻画の描画がある箇所は改行して筆者がトレースしたものを挿入掲載した。

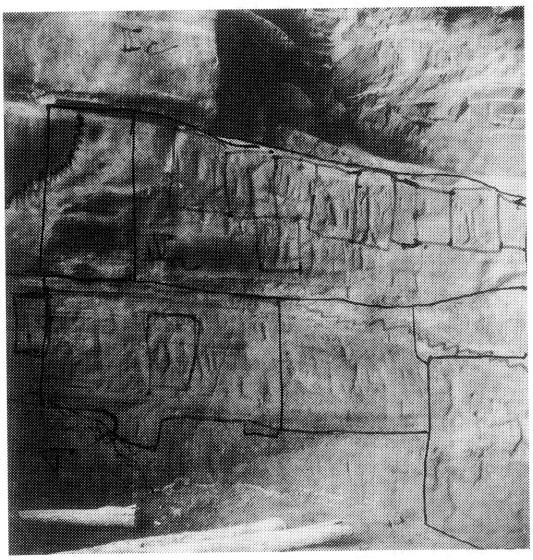


写真　1　フゴッペ洞窟南壁奥

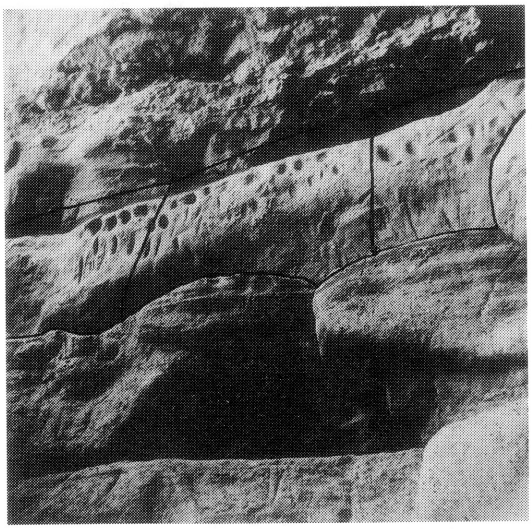


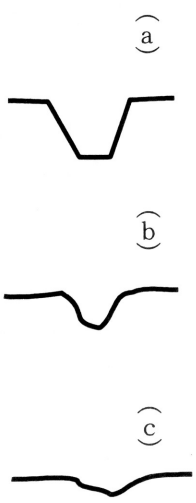
写真　2　フゴッペ洞窟南壁上段

畚部洞窟古代彫刻の考察

第一章　序 —— 分解の方法について——

この彫刻は洞窟内外ほとんど全面について乱雑に、特にこれと言う配列も無く刻まれており現在の表土以下、トレンチにより確認された最後の包含層まで三〇〇センチの深さがあり、そこまで彫刻が連続するか否かは不明ではあるが現在まで発掘によって露出せる彫刻についての分析となる。

彫刻を注意してみると、特に鮮明なるもの（a）及び、ゆるやかなカーブを断面に見せるもの（b）又、ほとんど痕跡として発見に苦しむもの（c）の三種と、その中間が存し、一彫刻であ（り）つつも、ある部分は鮮明であり他部分は殆ど痕跡とまで風化したものもあって彫刻の鮮明度による分類は不可能であり又、鮮明なる彫刻と、痕跡が同一壁面に隣接して高い部分ほど鮮明であり低い壁面ほど痕跡化すると言うことも見られないため、場所によって分類することも意味なしと考えられる。



もうひとつ、後に述べることではあるけれども、一般に旧石器時代の壁画については写実的なるほど古く、単純な記号化するほど新しいと言う。古代画の進歩をあてはめて見て写実的なるものと記号化の進んだものが混在し又大きな彫刻小さな彫刻を取って見ても大きなもの写実的とは限らず又小さな彫刻が写実的と言う傾向も見られない。

ただ一つ注意すべきは私が四年間洞窟に通っての経験ではあるが、場所によっては降雨の場合、同じ壁面に雨ダレが落ち又場所によっては山からの流れ雨水が滝の如く流れ落ちる場所もあり、この点は注意してみなければならない。

大きな彫刻かならずしも下になく鮮明というでもなく小さな彫刻かならずしも上になく不鮮明ということもない。

又、いわゆる写実的なるものかならずしも不鮮明でなく低い部分に存すると言うこともなく、記号化せるものかならずしも上部になく鮮明ということも見出せない。

したがってこの彫刻の分析にあたって彫刻の位置の高下、鮮明度、写実度、彫刻の大小等によって分析することは不可能無意味であって全壁面を一として同壁面に何度も彫り加えられて現在にいたったと考えるのが適当であって、まず第一に各彫刻がいかなる部分を持っているかを分析し、その後その分析にしたがって考察してゆきたいと思う。

ところで彫刻の分析であるが全壁面に存する彫刻のうち完全に人工によるものか、あるいは自然凹部かの判定が困難なもの又、彫刻が密集しているためいずれをどの彫刻の部分とするか一見判定の困難なものもあるので、まず初めに全彫刻の中から、あきらかに人工により、かつ単独なる彫刻をひろいだしそれによって基本型をもとめ、その基本型を中心として全彫刻を分類考察して行こうと思う。

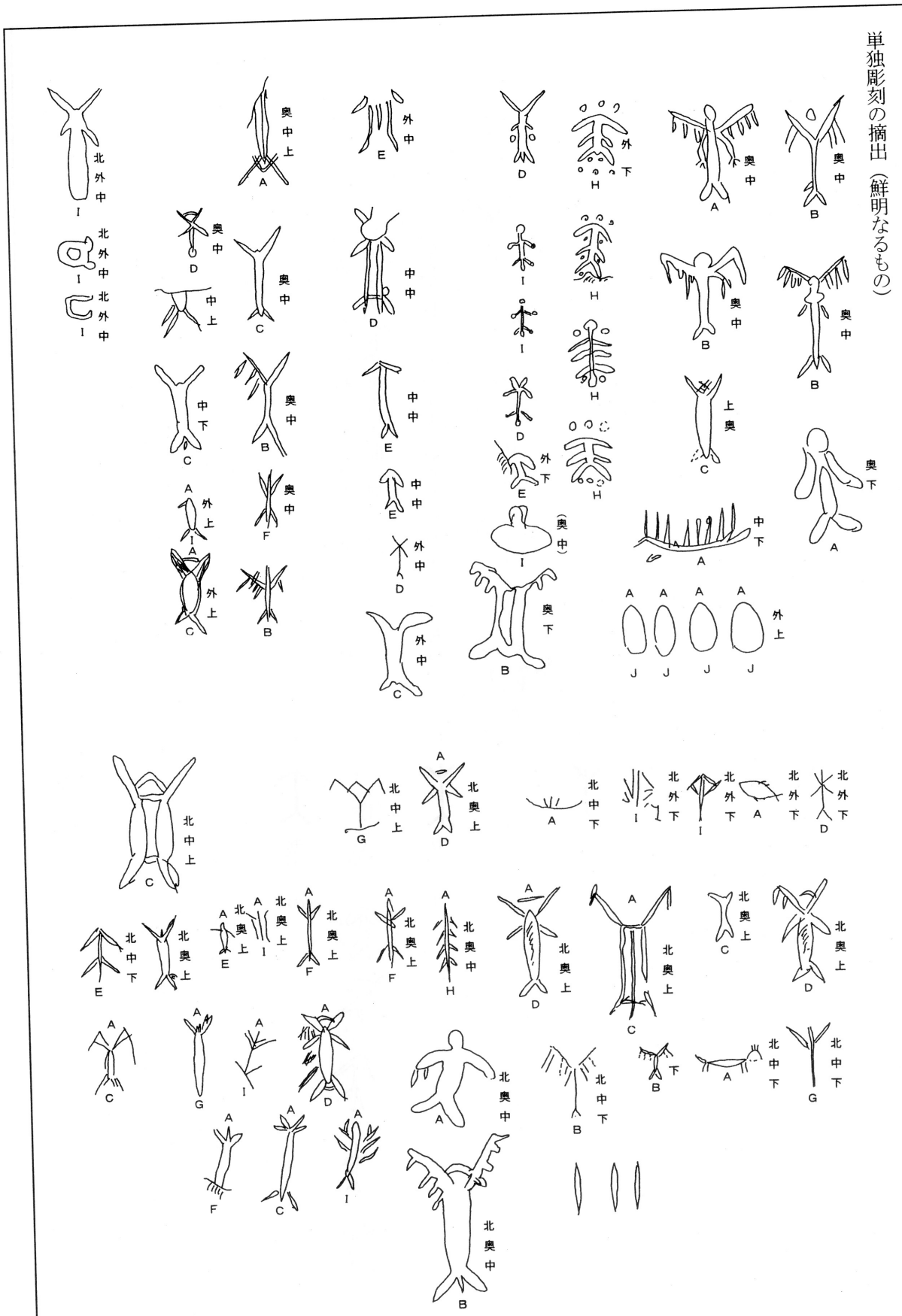
したがってこの分類は誤りであると批判されることも十分あり得るわけであるが出来るだけ客観的にやって見たいと思う。

本　論

一、単独彫刻の摘出（鮮明なるもの）

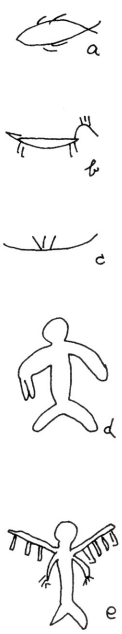
序論で述べた通り、全壁面を一つとして考察するが、全壁面を見て完全に人工による凹部と断言することの出来ないものが大部分であり、かつ又人工の凹部があってもそれがいずれの彫刻の部分となるか判定困難な接触彫刻が多数存在するのであって、かならずしもこの一文が全てをあらわすものでもなく、他の人によって彫刻群の分解も行なわれると考え、独断の憂い多分にあると信じるが考古学的興味を持ってこれに接した十年間の一つの結果としてこの一文をなし一つのまとめとして見たいと考えるものです。

単独彫刻の摘出（鮮明なるもの）



二、基本型の模写

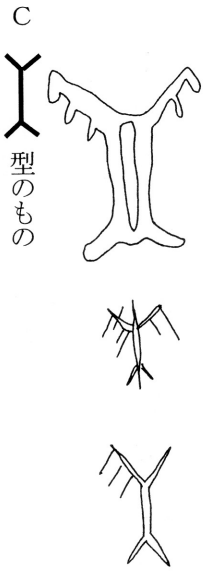
鮮明なる単独彫刻を見るとまず第一に明らかに写実的であって何たるかを分り得るものをAとして見ると次の七ケとなる。



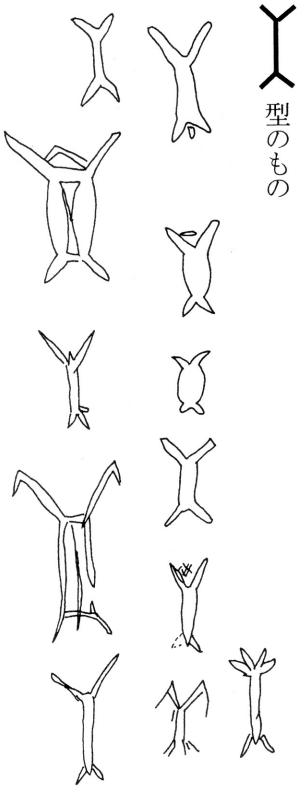
このうちaは魚、bは四足獣、cとfは船、dとgは人間でありeも短胴的、指、足の人間と考えられ肩からの羽状の部分は人間が肩から何かをつけている状態の実写と見られる。

次に残りの彫刻のうち同類と見なすものをまとめるとB（羽状部分のあるもの）

C



型のもの



D

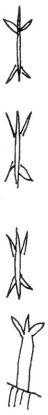
型のもの

E

型のもの

F

型のもの



G

型のもの

H

型のもの

三、分類別の分解

1 洞内奥部北壁上段 P1、P5、
2 洞内奥部北壁中断 P4、P3、
3 洞内奥部北壁下段 P2、
4 洞内中部北壁下段 P6、
5 洞内中部北壁上段 P7、
6 洞内中部北壁中段 P9、
7 洞外北壁下段 P10、
8 洞内奥部南壁上段 P11、
9 洞内中部南壁上段 P12、
10 洞内外部南壁上段 P12、P13、
11 洞内外部南壁中段 P14、
12 洞内中部南壁中段 P14、
13 洞内奥部南壁中段 P14、P15、
14 洞内奥部南壁下段 P16、

以上鮮明、単独なる彫刻を眺めると写実的なるものを除いて多少の差が又若干の追加部分があるが、次の基本形を考えて差し支えないと思う。

この基本形を考察すると全部、上部、胴（部）、下部の三部分より成り、上部及び下部は多少の差はあるが、胴部は必ず存在し縦の線として殆ど全彫刻に存在するわけで、縦の線は素地として二本或いは三本となっても必ず存在して（之）に上部は

等各線が考えられる（ア）下部は

この二つか（ウ）さもなければ存在しないの三種よりないことに気づくであろう。

そこでこの基本形を〇〇として出きるだけ客観的に全壁面の彫刻を分解して一型するわけであるが鮮明なる彫刻と不鮮明なる彫刻とを分けて分解すればよいのであるけれど鮮明な彫刻にあっても部分によって非常に深くほられ部分によってはごく浅く掘られるものがあり

かかる彫刻が風化する場合浅い部分が先に消えるのが普通であって例へばこの彫刻が

となっていたとしても明らかに鮮明な彫刻（と）して分解されることになり鮮明なるもの不鮮明なるものと分けてもそれが本来彫刻された当初のものを示すと言うことも当たらない。

又前述せるとおり一彫刻であっても部分により鮮明であり、

部分により自然凹部の如き様を呈することを考えて鮮明、不鮮明の分類にしたがった分解は不可能であってここでは現在あるがままの状態によって分解して行くことにする。

Ⅵ まとめにかえて

奥野氏が遺された「畚部洞窟古代彫刻の考察」は発見直後のフゴッペ洞窟の状況を伝え，また幾つかの注目すべき示唆を与えている。

1 点目は岩面刻画の状況であるが，発見時点で刻画切削面が不明瞭で画像を特定出来ないものが既にあり，それは洞窟壁面の形状や刻画の位置の高低から刻画の新旧を推定するのは困難であることを氏が感じていること，刻画の切削面の後退・剥落といった劣化が全壁面に見られたことを示している。氏が洞窟に立入って観察した4年間には，壁面を「滝の如く」洗う降雨があった。浸入した水分は冬期間には凍結したであろうし，洞窟内壁は露出して外気に触れ，水の浸入は洞窟を構成する岩体の亀裂や刻画そのものに影響を与え，刻画は発見直後からその劣化速度を速めつつあったものと思われる。

2 点目は氏が「摘出」を試みた刻画の一部は不明瞭なため，「判定困難な接触彫刻が多数存在」したと観察していることである。

「接触彫刻」と判断した画像は，例えば氏自身が計測を行なった洞窟奥部の細い線刻の部分があり，計測図及び模写図のノートにはこの部分を示して「ウスクテ明瞭ナラズ」と記入している（**図1**）。

この部分を実測図と比較すると，氏が計測しながらも「人工」ではないと判断した画像が削除されている（**図2**）。

また別の刻画を同ノートで見れば，北壁の刻画を分類している頁中に「他彫刻へ」刻画を独立させて別図を作成する意図が窺える記載もあった。

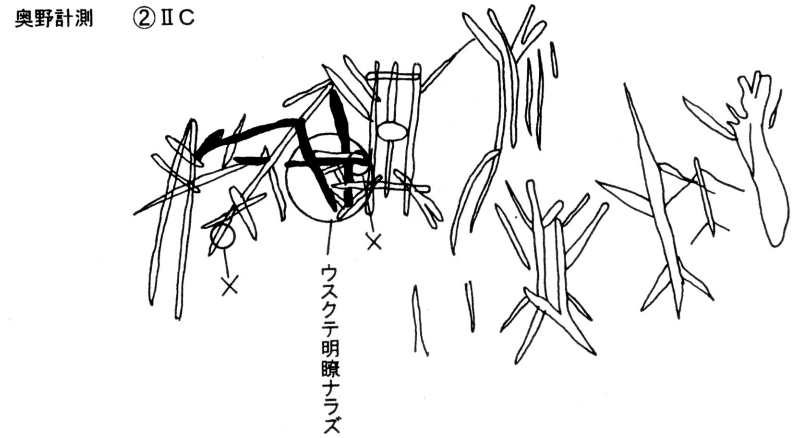


図 1 奥野氏作成の彫刻計測図（洞窟最奥部）

図 2 図 1に該当する部分 （『フゴッペ洞窟』1/10 実測図のトレース）

同ノートには1951年或いは1952年に計測したものを1954年の時点で奥野氏が修正した図が4頁あり，画像判定の作業は，計測，模写，修正の要否判断，修正といった手順で行なわれたものと思われる[5]。

3点目は刻画を上部，胴部，下部と3つの部位に分けた分類を試みていることである。氏は必ず存在する胴部に上部と下部を組合わせたもの，すなわち上部には羽状或いは角状など7種の線，下部には2種の線或いは存在せずの計3種があって，それらの組合せで刻画が構成されると考えている。「胴部」が必ず存在するという点は，後に『フゴッペ洞窟』において名取武光氏によって報告される「フゴッペ彫刻とその意義」に見る如く「原体が人に発していると推定される」多くの刻画は「縦位」で表現されたとする考え方と同様，刻画の主軸方向が垂直方向であることに着目したものと言えるであろう[6]。

後に峯山巌氏は，刻画の画像と壁面位置ごとの関係を分類した「岩壁刻画の出現度数」や，更にそれを細分化した「有翼人が刻画されている数」，「有角人が刻画されている数」として壁面の位置と画像別の分類を示している[7]。

大島秀俊氏は「像の主軸方向が揃う」点に着目し，更に「水平方向のレベルが一致」する点，「像の間隔が一定になる」点と合わせて更に深化させたグルーピングによる考察を行なっている[8]。

奥野氏は「考察」の文中で刻画を上下に3分割した分類と，単独かつ明瞭な抽出可能な刻画の分類の双方を提起している。名取，峯山，大島各氏は単独での刻画画像とそれらを群として捉えた解釈を試みたと言え，刻画を分割するか，単独として捉えるか，群として捉えるかといった着眼点は名取，峯山，大島各氏と奥野氏との間で微妙な相違が見られる。

4点目は刻画の制作過程についてであるが，奥野氏は「全壁面を一として」同じ壁面に何度も掘り加えられたと考えた。これは「写実的なるものかならずしも不鮮明でなく低い部分に存すると言うこともなく、記号化せるものかならずしも上部になく鮮明ということも見出せない」という表現に見る如く，刻画の新旧について判断するには位置の高低，画像が写実的か否かという点では判断が出来ないとした。つまり記号化した刻画は，写実的画像が時間の経過と共に変化したものではないということである。

これは名取氏が「1類」から「4類」まで分類しそれらを「一系列」とし，「形態の変化」が連続していると捉えたこと，また峯山氏が「抽象化が進んだ」と表現した「仮装人像の系譜」の両者が時系列による変化と考えたものであれば，それらの分類は奥野氏のものとは異なることを示している[9]。

こうして奥野氏は，刻画の配置や明瞭不明瞭の別からは判断せず，「全壁面を一」として，「明らかに人工により、かつ単独なる」刻画を抽出し，「各彫刻がいかなる部分を持っているか」について3つの部位に分解して考察を試みようとしたが，残念ながら考察は未完のままに遺稿となった。

氏の観察は4年間継続して続けられ，『フゴッペ洞窟』添付の実測図にその成果が結実したが，小稿で紹介した遺稿が完結し報告されれば更に多くの知見がもたらされたのではないであろうか。

発見・発掘から50年以上の年月が経過し，フゴッペ洞窟岩面刻画は保存施設の改築や環境制御を施しても，岩体の崩落や表面の剥離，微生物の繁殖など劣化を示す事態がこれまでに確認されている。

奥野氏や他担当者が観察した発見当時の岩面刻画を見ることは不可能となり，小稿で報告した奥野資料始め他の写真資料や記録等から発見当時を窺い知ることが出来るのみとなった。今後は同様の資料をより多く集積し，現在工事中の新保存施設を広い視野からの岩面刻画研究を可能とする場にしてゆきたいと考えている。

最後に小稿を報告する過程で，掛川源一郎氏，北海道開拓記念館　右代啓視氏，伊達市教育委員会　大島直行氏　同　青野友哉氏のご協力，ご指導を頂いた。

また余市郷土研究会　川端有氏にはお借りした資料の内容について貴重なご助言を頂いた。

奥野美恵子氏，奥野淑枝氏には奥野義扶氏の遺稿をお借りする機会を賜った。記して深く感謝の意を表する次第である。

＜脚注＞

1) 名取武光ほかフゴッペ洞窟調査団　1970 年　『フゴッペ洞窟』　P. 2
フゴッペ洞窟調査団の最終的なメンバー一覧に各作業の分担と氏名が記載される。現地調査参加者は氏名の前に○が付されるが，ここでは奥野氏が彫刻模写の現地調査に参加していない。

2) 前掲１）
北海道考古学会　1988 年　『北海道考古学　第 24 輯』　桐谷賢一「フゴッペ洞窟発掘の頃」P. 35 には模写の様子について詳細に述べられている。

3) 前掲２）には 1954 年に丸山南壁側の土砂が自然に崩れ，南壁の先端に 12 個の刻画が発見されたとある。またこの刻画群の模写は奥野氏ではなく，桐谷賢一氏が翌 1955 年に原寸図を作成したことが述べられている。

4) 1/10 のトレース原図は現在まで伊達市教育委員会と個人蔵の 2 点が確認されている。また原寸大で切削面の深さが記入された図面はコピーの 1 部が余市町教委に保管されている。

5) 前掲２）　『フゴッペ洞窟』に添付された 1/10 実測図は，桐谷氏によれば「奥野氏の図は原寸大なので膨大な量になって来た」ため，当初は「索引用」に作製することが提案されたものであった。

6) 前掲１）P. 135　第 54 表　フゴッペ洞窟の彫刻分類表
名取武光氏は，表現手法をⅠ類（陰刻による影絵様の表現），Ⅱ類（線刻の輪郭による表現）の 2 つに分け，Ⅰ類を更に，独立像らしきもの 1 類（人物）及び 2 類（動物の仮装をしている人物），類似した彫刻の羅列 3 類（1 類と 2 類に近似しより単純な形）及び 4 類（舟窩状）とし，これらを「1 類から 4 類にいたる全彫刻は縦位を示している。」とした。
この分類表では「独立像らしきもの」と「類似した彫刻の羅列」とに分け，刻画を単体と群とで捉えたがその分類の基準は示されていない。

7) 峰山巌　1983 年　『謎の刻画　フゴッペ洞窟』　P. 81　表 2「岩壁刻画のテーマ（岩壁刻画の出現度数）」　P. 90　表 3「有翼人が刻画されている数」　P. 94　表 4「有角人が刻画されている数」

8) 北海道考古学会　1995 年　『北海道考古学　第 31 輯』　大島秀俊　「フゴッペ洞窟および手宮洞窟壁画の一考察」P. 208

9) 前掲１）P. 137 に 1 類から 4 類までを一系列に考えた理由を 3 点述べ，その 1 点目で「形態の変化が連続している」と述べている。
前掲７）P. 83 の「仮装人像の系譜」には「ａ→ｂ→ｃ→ｄの順序で抽象化が進んだ」とある。

余市水産博物館研究報告第6号：45－48. Mar. 2003

平成14年度史跡フゴッペ洞窟保存調査事業の概要について

1. はじめに

平成 10 年度から開始された史跡フゴッペ洞窟保存調査事業は3年間の基礎調査と保存施設改修に向けた実施設計が終了し，第1期工事が行われた。洞窟内外部測量調査などの継続調査は今年度も実施した。

また平成 12 年度より北海道開拓記念館を研究主体として新たに開始された文部科学省科学研究費補助金（地域連携推進研究費（2））「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」が現在継続中である。また平成 13 年度に終了した鳴門教育大学小川勝助教授による「フゴッペ洞窟・岩面刻画の総合的研究」（同じく文部科学省科学研究費による調査）の研究成果報告書が刊行された。

ここでは今年度の継続調査の概要，保存施設改修工事（建築主体工事）と余市町教委文化財課が協力した北海道開拓記念館の地域連携科研調査の中間報告を行う（平成15年2月28日現在）。

2. 平成14年度保存調査の概要

本年度も2回の保存調査委員会（以下，調査委）が実施された。第1回調査委は6月3日に実施され，平成13年度調査事業の総括と平成14年度事業の進め方について議論された。第2回目調査委は10月28日に実施され，本年度調査の中間報告と改修工事の進捗状況について報告，議論された。

以下に改修工事及び各調査について議事録より概要を紹介する。

(1)保存施設改修工事（建築主体工事）

6月下旬着工，7月中に既存部分の取り壊し，壁天井改修，リフリート工事を実施した。7月から8月に鉄筋の錆部分が面的に出ていたところを補修した。

屋上V字のパラペットの立上り壁を壊したが，屋上モルタルのV字パラペットの内外で若干段差があったので，高い方を相当量撤去した。9月末にはコンクリート打設，11月には1階上部の配筋工に入った。

洞窟内の仮説空調を取り付けた。外部温度と内部温湿度のグラフを見れば内部環境は一定している。湿度も同様にほぼ90%で推移した。

リフリート工事は部位全部を調査，補修必要な箇所はナンバーを付した。庇には表面に鉄筋が見えていた状況で，クラックの補修についてはVカットで取り除きジャンカーも除去，錆落し，高圧洗浄，防錆剤処理を行なった。

設計は既に説明した内容から躯体レベルでの変更はない。照明器具については次年度工事発注に向けてサンプルとしてダイオードを提案した。これは寿命が長く4万時間程度で器具の故障がなければメンテナンスフリーと考えてもよい。

1週間程度の遅れがあったものの，ほぼ順調に進行し，平成15年2月28日現在は今年度工事がほぼ終了した。

10月15日から厳冬期前の試験運転として仮設

氏　名	所　属	氏　名	所　属
◎福田　正巳	北海道大学低温科学研究所 凍上学部門・教授	山岸　宏光	新潟大学理学部自然環境科学科・ 教授
○三浦　定俊	独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所保存科学部・部長	朽津　信明	独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所・国際文化財保存修復協力センター・主任研究官
内田　明人	独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所修復技術部・応用技術研究室長	土門　仁	余市町建設水道部住宅都市課・課長
三田地　利之	北海道大学大学院工学研究科・ 地盤地学講座・教授	佐々木　功治	余市町教育委員会・教育次長

表. 平成14年度の史跡フゴッペ洞窟保存調査委員会委員一覧（◎:委員長・○副委員長）

空調を稼動させ，約20℃で推移，試験運転下の湿度は同温度を観察した8月頃に比してかなり低下したため，厳冬期の運転は緊急避難的に実施する予定であることを報告した。

施設完成後の各種モニタリングの態様として，外部に土壌水分計2点，温湿度計各1点，継目計3点，内部では土壌水分計を1点増設して計4点，変位計はB壁（南壁）3点，背後の亀裂に2点，天井の岩体を残せば4点の計9点，ほか外部の岩盤内温度計5点を候補としたが，岩盤内温度計は必要なしと判断された。

丸山頂上に試験的に敷設した植生シートを確認した。日射や傾斜の状況を勘案しても概ね良好と判断されていることを報告した。

洞窟前庭部発掘調査については5月20日から6月28日まで行ない，2.6m深まで掘下げた。一部は洞窟内部から出土した後北式土器と並行する遺物が見られたが，大半が北大式であった。遺構は焼土（焚火跡）24ヶ所が確認され，長径1～2mのものが多く，ベンガラや炭化物（クルミ他）が混入しているものが多かった。

(2)洞窟内外部部測量調査

平成13年度は①洞窟内部北側壁面（C壁）測量調査として22.5㎡を50cm方眼，90グリッドで展開，②洞窟外部南側壁面（E面）測量調査としてトレンチ調査に伴う記録撮影を行い，③植生調査に伴う測量調査として樹木の位置出し測量調査を行った。

植生調査に伴う測量では丸山全体の植生把握を目的に測量を実施，A3版1/100のＣＡＤ出力を行なった。

平成14年度はC壁（南壁）未調査の部分を対象とした測量調査を行ない，計画範囲の全てが完了した。

北側C壁中間部は50cm方眼で50グリッド，工事に伴い内部の基準点の移設も行った。撮影等は従来と同様に行い現在を整理中である。

従前と同様に50×50cmの50グリッドを設定した。追加作業としてC壁面の施設外部で新たに刻画が確認されたため，この区域も追加で測量調査を行った。

これまで行ってきた測量は地質解析の基礎資料となり，また史跡周辺の詳細な地形図となる。

今回の保存調査事業に活用されることは勿論，将来の更なる保存調査の際にも比較資料とする。また測量基準点は将来の調査を考え，史跡内に残したい。

(3)土壌水分量測定調査

平成13年度中の水分量年間変位については特に変化はない。壁面の水分量データで気付くのは表面の崩落が危惧されるところは比較的乾いている印象か。

グラフで一部水分率が下ちているのは，変位計の方向性チェックのため全機材を確認し，水分計も一度抜いて再度差し込んだ為にこういう状況になった。

外の水分計のグラフが一時期跳ね上がっているのは降雨である。水分計№53は雨に非常に反応しやすい。

内部の土壌水分計は合わせて見ると雨量のピークになるところと，ほぼ一致している。

7月12日から改修工事に伴って全ての計器類のインタバルを1時間に変更した。

平成14年度の中間報告であるが，98年11月1日から02年10月16日までのデータを見ると98年からのグラフでは途中，№57と№58の水分計の抜けがあり，現状復帰をした箇所のグラフが切れている。№58は若干高い時期があったが，工事施工の影響ではないものと思われる。

(4)陰刻面経年変位量測定調査

継続して陰刻面の経年変位を測定している。洞窟内部に17点，洞窟と保存施設との継目に3点の計20点の変位計を設置している。

まずセンサーの方向性について錯誤があったことは前回報告したが，センサーの圧縮側が＋方向，同じく引張側が－方向となることを再確認する。

1998年10月1日～2002年5月1日の各データでは継目計，変位計，クラック計，岩盤内温度，温湿度，雨量計等のデータに関しては一定方向への動きはなく異常は見られていない。

前回委員会で報告したが，架台の変位計が動いた。2002年8月末頃に地震があって，架台上に設置してあるダミーに地震の際に小石が当って変位計に動きが出たものと推測している。

内部湿度が下がり気味と見うけられる。99年同時期と比較しても低く，全体的に乾きつつあるのではないか。

最適湿度の設定は難しいと考えるが，極端な湿潤や乾燥は避けるべきである。洞窟が閉塞した状態で外気の交換が無ければ，適度に湿気がある状

態が長期間にわたるため良好に保存されると判断できる。壁面が少し白っぽくなっていたところは石膏だと思われるが，それが背後で蓄積してくると剥がれやすくなる。

緑色微生物に関しては照明条件との比較が必要だが他にも相対湿度，水分の供給など他の要因がある。フゴッペの場合，外部からの水の供給との関係があってその関連が大きい。

内部湿度は工事中に状況が変わるものと思われるが，その際に目安となる湿度はどれくらいか。

モニタリングの結果では 80%を切ることはなかった。それが最適かどうか不明であるが 80%を切らない配慮が必要か。手宮洞窟では湿りすぎる3月に除湿した。

フゴッペでは季節変動として，春から夏にかけて乾き，冬は外部の水が凍って更に乾く。最適値がなかなか見えないので今の状態がよいのではないか。

(5)地質解析調査

平成 10 年度から地質的特徴や崩落危険度を把握するため継続して調査してきた。これは外壁における崩壊調査を行ない，崩壊のパターンを把握するためのもので，内壁と外壁は同じ様な傾向があった。崩壊箇所は西側に偏在し，断層系のメインは南北方向やや東よりに走る。

内部亀裂位置は外壁 A 面 B 面に集中した。内壁に見られる亀裂系では AB 壁面はほぼ同方向に亀裂が見られた。

外壁の崩落状況と内側の陰刻面の崩落状況との対応をとることについては，外壁露出面と比して低すぎたが亀裂系については凡そ判明した。

はっきりしたのは角礫の所がしっかりしていて，その下のマッシブな砂層が弱く，ここが抉られオーバーハング状になり，上方のしっかりとした角礫が固まりとなって落下する可能性がある。

総合三次元地質図作成と地質データ等統合ファイル作成，C 壁面の地質スケッチ及び打診調査は現地作業が終了し，取りまとめ中である。

また奥部天井の危険岩体への除去やネット施工など考えられる7つの工法を提案する（後述）。

(6)照明影響調査

平成13年度調査では現地照射試験を継続した。また現地照明点灯時間測定，室内照射実験を行なった。

照明時間と照度の相関関係を把握するため，750ルクスで12時間，4時間，1時間をそれぞれ照射した点灯時間を見るラボ実験を行なった。結果として藻類の増殖は照射時間が短いほど生物の増殖量が抑えられることが確認された。

光の強度を変えた照射実験では，光の強さは750ルクス，20ルクスとし，後者は現状の照明光の強さに近いものと仮定して行なった。それぞれ微生物の種が違うもので実験し，結果は照射時間が短い場合，藻類の生育が抑制されることが確認された。

しきい値の設定は，入場者数の多い夏でも滞在時間や団体・個人の入場者の違い等があるので一概に言えず設定は難しい。

現地試験では緑色微生物モニタリング調査として分光色彩計を用いた調査を実施中である。

平成14年度は工事が開始され，工事期間中は現地試験区で続いた暗い状態が良い影響を与えたのか，測定値3箇所ともマイナスからプラスへ移る傾向を示した。やはり光源の種類よりは照明時間の長短による環境変化が微生物の生育を左右する傾向を示していることが言える。

3. 平成15年度事業について

平成15年度は内装等の仕上，設備工事，電気工事を予定している。

(環境制御)

洞窟内部が一時的に過湿度状態になった時に強制的に除湿を行なうことを考えたが，水の侵入が少なくなっており，内部環境が乾燥ぎみではないかという意見もあったので除湿器の設置は見送った。

展示の内容とも関わってくるので，展示効果の面から具体的な照明の規格を提出して頂きたい。基本原則は照明時間の制御であり，照度は効果的に見える明るさを保つことを条件とする。

漏水や内部環境の保持については，恒常的メンテナンスを行うことが前提であって，完成後も定期的に調査を行うという姿勢を崩さないようお願いしたい。

(展示)

フゴッペの位置付けは時間と空間の情報で与えられ，いつの時代か，他と比較してどういうものかという情報が過度でなく与えられる場であって欲しい。学びの要素，余地を残し，もう少し自分で考えてみたくなるようなものにしたい。

展示に関わる留意点として，解説文・写真キャ

プションを小学3・4年生が理解出来る程度とし，視線計画は車椅子での見学者の視線にあわせた高さとしたい。視覚障害者向けの点字解説やロシア語・英語解説も将来的に考えている。

照明についてはダイオードの提案があり，他の照明機器と併せ，スペクトル測定等を今後も行ない，カプセル設置後は刻画を照らす照明計画を立てるための試験を行なう。

施設完成時に考えられる点として他には敷地外の誘導サイン，物販，入場券・パンフレット類の更新，ホームページ作成，支援組織，施設前道路の嵩上工事，完成式典，記念シンポジウム等の諸準備が挙げられる

展示については北海道開拓記念館の協力を仰ぎながら進めて行きたい。またジオラマ作成はこの補助事業では義務となっている。

（奥部天井の危険岩体除去の要否）

奥部天井面にある危険岩体であるが，ここは打診の結果が悪かった箇所で現状で落ちる心配はないが，落下した場合，直下に刻画があるので，その対策をしたいということであった。

岩体の対処方法として①対応無し，②静的破砕剤使用の岩体除去，③静的破砕剤使用の岩体除去とワイヤー設置，④岩体除去を行なわないワイヤー設置，⑤岩盤接着と静的破砕剤使用の岩体除去，⑥岩盤接着とワイヤー設置，⑦岩盤接着と岩体除去，ワイヤー設置という7つが挙げられた。

全体的な処置は恐いので，除去法は取りづらい。接着法も完全に固化するのは無理なので難点がある。いずれも中途半端だが，多少でも接着して両端をロープで結んで落ちてくるのをネットにして支えこむか。

保存調査委員会として提案できるのは，ネット工法で安全なピン打ちをして両脇からネットで支えることか。

3．文部省科学研究費補助金について
（地域振興推進研究費（2））「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」

北海道開拓記念館の科研費による調査は平成12年度から3年間の年次計画で行われ，本年度はその最終年にあたる。同調査では，フゴッペ洞窟を情報発信の拠点すなわちフィールドステーションとして活用してゆくことを考えている。

今年度は以下の調査が行われた。

(1) 国内調査（国内史跡，博物館等の調査など）
(2) 国外調査（フランス，ペリゴール地方及びスペイン北部海岸地域）
(3) フゴッペ洞窟関連資料の所在調査
(6) フゴッペ洞窟関連古写真の調査
(7) フゴッペ洞窟フォーラム2002の開催
3月29日（土），於　余市町中央公民館
「これからのフゴッペ洞窟」（4つの報告とフォーラム形式による討論，下表参照）

講演（報告）名	講演（報告）者氏名・所属
報告1「盛岡市・仙台市における史跡の保存と活用」	盛　昭史氏（余市町教育委員会　文化財課長）
報告2「東京都における史跡の保存と活用」	乾　芳宏氏（余市町教育委員会　文化財兼学芸係長）
報告3「富山における史跡の保存と活用」	浅野　敏昭氏（余市町教育委員会　学芸員）
報告4「ヨーロッパにおける史跡の保存と活用」	乾　芳宏氏（余市町教育委員会　文化財兼学芸係長）
フォーラム「これからのフゴッペ洞窟」	
コメンテーター：余市町教育委員会教育長	利　輝夫氏
パネラー　：早稲田大学教授	菊池徹夫氏
北海道大学低温科学研究所教授	福田正己氏
鳴門教育大学助教授	小川　勝氏
北海道開拓記念館	赤松　守雄氏
北海道開拓記念館事業部長	氏家　等氏
北海道開拓記念館主任学芸員	山田悟郎氏

表．フゴッペフォーラム2002　報告名と発表者名，コメンテータ及びパネラー一覧

余市水産博物館研究報告第６号：49-53. Mar. 2003

平成１４年度博物館活動報告

１ 運営

（1） 組織

余市水産博物館（余市町教育委員会 文化財課）

（平成 15 年 1 月 31 日現在）

教育長	利輝夫	業務係長	盛昭史
教育次長	佐々木功治	学芸員	浅野敏昭
館長 （天体観測所長兼務） （庶務係長兼務）	盛昭史	公務補	相馬征四郎
文化財係長 （学芸員兼務） （社会教育主事）	乾芳宏		

文化財専門委員会（5 名）

委員長	本郷 保寛
副委員長	梶 政泰
委員	林 彭
委員	大住 克明
委員	澤野 宗一
任期 （平成 13 年 12 月 1 日～15 年 11 月 30 日）	

文化財関係施設管理運営委員会（7 名）

委員長	川端 有
副委員長	高地 博俊
委員	星野 一誠
委員	岡島 君夫
委員	近藤 芳ニ
委員	野中 伸隆
委員	田村 政司
任期（平成 14 年 4 月 1 日～16 年 3 月 31 日）	

（2）平成 14年度の主な活動状況

4 月 16 日	大川小学校６年授業協力（大昔の生活）	8 月 6 日	鳴門教育大学小川助教授フゴッペ洞窟調査
4 月 23 日	文化財ボランティア説明員研修会	8 月 21 日	婦人学級講演会「余市の文化財」
5 月 17 日	沢町小学校６年授業協力（大昔の生活）	8 月 27 日	文化財パトロール（町内史跡・西崎山環状列石）
6 月 3 日	第１回フゴッペ洞窟保存調査委員会開催	9 月 4 日	フゴッペ洞窟北壁に「魚」の刻画再確認
6 月 28 日	文化財パトロール（西崎山環状列石）	9 月 12 日	西中学校１年授業協力（大昔の生活）
7 月 20 日	こりゃなんだミュージアム事業実施 「縄文土器の謎」	9 月 13 日	北海道立文書館による私文書調査
7 月 22 日	北海道開拓記念館フゴッペ洞窟撮影	9 月 13 日	古平小学校３年授業協力（ソーラン節が生れたころ）

7月25日	伊達市教育委員会所蔵の峯山資料調査	9月14日	こりゃなんだミュージアム事業実施 「石器を使おう」
9月24日	東京大池内研究室によるフゴッペ洞窟3元計測実施	12月　4日	旧下ヨイチ運上家燻蒸（～6日）
10月18日	余市町指定文化財サイカチの木調査	1月　5日	東京都立大学山田昌久助教授木製品同定調査
11月23日	文化財専門委員・管理運営委員町外視察（泊村）	1月　6日	「樺太を駈けた天涯」図書館展示
10月28日	第2回フゴッペ洞窟保存調査委員会開催	2月　3日	黒川小学校6年事業実施（ヨイチふしぎ発見！）
11月18日	博物館大掃除	2月19日	留萌市教育委員会博物館資料調査
12月10日	「市川文庫」資料調査	3月29日	フゴッペ洞窟フォーラム2002開催

（2）　文化財施設利用状況

平成14年度文化財施設見学者数（表参照）

2　教育普及活動

（1）　展示活動

・平成14年度博物館特別展『余市町の文化財』

期間：平成14年9月18日（水）～平成14年10月20日（日）

展示資料：余市町指定文化財の内実物資料及び写真資料

大川・入舟遺跡出土資料ほか考古遺物実物資料

市川文庫関連資料

・企画展示『樺太を駈けた天涯』市川與一郎（天涯）氏の遺した市川文庫の紹介（於　余市町図書館）

期間：平成15年1月6日（月）～平成15年3月30日（日）

展示資料：実物資料（樺太地図・絵はがき・キセル・たばこケース他）

写真資料（「市川文庫」樺太及び日露戦争関連資料）

（2）　教育活動

余市町郷土文化財愛護少年団の年間活動一覧

実施月日	活動内容	実施月日	活動内容
5月18日（土）	入団式	10月　5日（土）	りんごの歴史学習会
6月15日（土）	シリパ山登山	11月　2日（土）	江戸時代のヨイチお話会
7月14日（土）	西崎山環状列石清掃	12月21日（土）	餅つき
8月　8日（木）	黒松内村ブナセンター見学	2月2日（日）	手打ちそば作り
9月　7日（土）	リタロード・ウォーキング及びオーク植樹式の協力参加	3月9日（日）	勉強会・解団式

(3)　学芸員の館外活動

本年度は昨年度同様，館所蔵資料を使用した社会科及び総合学習への授業協力や講師の派遣依頼を受け，町内外で活動を実施した。

月　　日	活動内容	活動場所	担当者
平成14年4月16日(月)	大昔の生活	大川小（6年）	乾文化財係長
平成14年5月17日(木)	大昔の生活	沢町小（6年）	乾文化財係長
平成14年9月12日(水)	大昔の生活（余教研）	西中（1年）	乾文化財係長
平成14年9月13日(木)	ソーラン節が生まれた頃	古平小（3年）	浅野学芸員
平成14年12月10日(火) ～12月19日（水）	北海道開拓記念館 「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」に係るフランス・スペインの岩面刻画の調査	フランス （ペリゴール地方） スペイン （北部海岸地方）	浅野学芸員 乾文化財係長
平成15年2月3日（月）	ヨイチふしぎ発見！	黒川小（5年）	浅野学芸員

4　資料収集活動

平成13年2月28日までの受入資料は生活資料6点，写真資料117点の計123点であった。

5　調査研究活動

(1)　フゴッペ洞窟発掘調査　　担当：乾芳宏

本年度は史跡フゴッペ洞窟保存施設改修工事に先立ち，現保存施設の東側地点の発掘調査を400㎡の範囲を対象として行なった。

続縄文時代後半（後北式～北大式）から擦文時代前半にかけての遺物約1,000点が出土し，遺物の大半が土器で，他は剥片・礫類であった。

(2) 安芸遺跡発掘調査　　担当：乾芳宏

登川左岸の標高約3mの黒川砂丘上に立地する遺跡であり，本年度は360㎡が発掘調査面積であった。出土遺物は総点数約80,000点，土器は約70,000点，縄文時代中期の北筒式・余市式から後期の手稲式・ホッケマ式に相当する時期であり，後期の土器が主体であった。石器は剥片石器が204点，礫石器が156点を数える。土製品が54点，石製品が27点を数える。木製品は48点が発見され現在，保存処理を実施中である。

(3) フゴッペ洞窟保存調査　　担当：浅野敏昭

平成10年度から開始されたフゴッペ洞窟保存調査事業に関わって，継続中の定点撮影及び温湿度測定，浸透水のＰｈ測定を行っている。昨年度から開始した文献資料，写真資料など基礎資料の整理を継続中である。

(4)　漁家文書調査　　担当：浅野敏昭

明治から昭和にかけての漁場経営について記された川内家文書整理の継続作業，林家文書の調査及び聞取り調査を行なっている。

表 1　　平成13年度文化財関係施設入場者数　　（下段の数字は平成12年度）

施設名	フゴッペ洞窟	旧下ヨイチ運上家	余市水産博物館	旧余市福原漁場	総　計
4 月	598	353	159	180	1,290
	527	287	126	150	1,090
5 月	1,339	834	321	829	3,323
	1,439	716	373	782	3,310
6 月	1,256	1,094	641	963	3,954
	1,569	1,737	892	1,513	5,711
7 月	1,530	1,103	574	1,155	4,362
	1,515	1,429	462	1,677	5,083
8 月	2,127	877	423	719	4,146
	1,893	1,037	485	667	4,082
9 月	1,330	934	423	579	3,266
	1,498	910	633	729	3,770
10月	1,110	550	318	377	2,355
	1,111	791	534	525	2,961
11月	514	278	299	257	1,348
	419	355	162	272	1,208
12月	79	28	88	177	372
	68	54	32	38	192
1 月	88	58	40	18	204
	30	29	69	24	152
2 月	124	71	47	27	269
	121	90	78	49	338
3 月	243	106	110	80	539
	268	106	70	52	496
計	10,338	6,286	3,443	5,361	25,428
	10,458	7,541	3,916	6,478	28,393

表 2　　平成14年度文化財関係施設入場者数

施設名	フゴッペ洞窟	旧下ヨイチ運上家	余市水産博物館	旧余市福原漁場	総　計
4 月	1,103	296	215	245	1,859
5 月	1,099	679	436	492	2,706
6 月		606	653	1,072	2,331
7 月		778	482	1,133	2,393
8 月		716	464	583	1,763
9 月		871	860	691	2,422
10月		647	408	370	1,425
11月		183	341	139	663
12月		37	30	79	146
1 月		22	15	16	53
計	2,202	4,835	3,904	4,820	15,761

余市水産博物館研究報告　第 6 号

平成 15 年 3 月 31 日　発行

編集・発行　余市水産博物館
〒046-0011　北海道余市郡余市町入舟町 21
TEL＆FAX　0135-22-6187